
DIGIMON Bake

秋水とさか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D I G I M O N B a k e

【Nコード】

N 6 2 9 6 W

【作者名】

秋水とさか

【あらすじ】

イグドラシルがNDWへ移行するPERFECT ARKが失敗に終わり、それ以降デジタルワールドは再び正常に時が流れ始めた。ホストコンピュータであるイグドラシルは姿を消し、「デジモン達の世界はデジモン達が創る」という考えに影で彼らを見守る事にする。

そこで主君を失くしたロイヤルナイツ。彼らは自己の判断でネットワークの管理を行う事となった。

元のあるべき姿に戻ったデジタルワールド。

世界は平和であると思われたが……

次に起った問題は“リアルワールド”との均衡。

人間とデジモンは共存できるのか

登場人物 1 p .

《デジモンBake》

“選ばれし者”がパートナーと出会う事が出来る。デジタル世界。

世界観はデジモンシリーズを参考にデジモンテイマーズが基本となり、子供だけでなく大人もデジモンとパートナーになる事が出来る。

選ばれし者

・テイマー；

D・アークがデジヴァイス。カードでパートナーの援護が出来る。

・闘士；

数少ない選ばれし者。セイバースのデジヴァイスで縦長の形。デジモン（パートナー）の力を借りて自ら戦う事が出来る。

3

・名前／一人称 で記載。

テイマー

> i30875—3941< ・く國土と 深しん／俺

中学3年、常に眠たい男。デジモンカードはバトルではなくコレクションとして集めている。バトル用の効果などは無視して、奇抜なカードアシストをしたがる。好物はもやし。

パートナーはロイヤルナイツのデユナスモン。

> i30876—3941< ・デユナスモン／俺

飛竜の力を持つ白銀竜のロイヤルナイツ。武士道や騎士道精神が強く礼儀を重んずる。ロードナイトモンとはよく一緒に行動し、ロイヤルナイツでもこの二人がコンビネーション抜群。

自分の考える“正義”を持つ者にはどんな相手でも忠誠を誓う。

その“正義”とは何か、はつきり決まらず生きてきたがリアルワールドで深と出会い、彼の“正義”に興味を持つ。その後彼をテイマーとして持つ事になったが、実質上深の保護者的な存在になりつつある。元々面倒見はいいので仕方なくも世話を焼いている。

> i30877 — 3941 < ・椎橋 しいばし 契 せつ / 俺

中学3年、陸上部。足が速く跳躍力もそこそこ。休日でもジャージを愛用している。カードバトルの腕は普通。パソコンやゲームはやりこなしているゲーム派。好物はハヤシライス。パートナーは七大魔王のベルゼブモン。

> i30878 — 3941 < ・ベルゼブモン / 俺 俺様

暴食を司る七大魔王。自分も食の量が多いが、どちらかというところ人に食べさせて楽しむのが好きらしい。他の大魔王と違い群れることを嫌い部下を持たない。飄々とした性格が目立ち、俺様体質。尻尾を動かすのが癖。ロイヤルナイツのデュークモンとは因縁がある。契とはよく食の事で言い争っている。特にハヤシカレーかの言い争いが多い。普段は契を苛めて楽しんでいるが、無意識に信頼を置いている事に気付いていない。普段からフラフラしているので、契は非常に困っている様子。

> i30879 — 3941 < ・石川 いしかわ 凜 りん / 私

契と同じ中学の3年、一番歳が上。性格は意気揚々。4人の中で一

番にテイマーとなった。リヴァイアモンを兎に角可愛いと言う。カードバトルもするがアニメ派。好物はグラタン。パートナーは七大魔王のリヴァイアモン。

> i30880—3941< ・リヴァイアモン/我

嫉妬を司る七大魔王。巨大な体と口を持ち、どんなものでも噛み砕いてしまう。片言でしか話さない事が多いが、別段普通には話せる。只大きな口を動かすのが面倒らしい。リアルワールドでは体の大きさを調整し小さ目。退化しないでそのまま居たがっている。始めて凜に会った時「かわいい」と言われ、その無邪気な姿からその言葉は素直なものだと感じた。今までの言葉は嫉妬と捉える事が殆どだったが、彼女の言葉には嫉妬心が湧く事はなく、テイマーとして受け入れる。実は世話好きの甘えん坊。

> i30881—3941< ・西ノ宮 にしのみやお 澪ノウチ

深と同じ中学の3年。クールな性格で口数が少く、考えた末、言葉よりも手足が先に動くタイプ。カードバトルの腕は中々のもので、カードアシストは4人の中で一番上手い。好物は氷砂糖。パートナーはロイヤルナイトのエグザモン。

> i30882—3941< ・エグザモン/俺

膨大なデータ量を持った“竜帝”と呼ばれるロイヤルナイト。その膨大なデータ量の為、何故か長生きしているのだと勘違いされがち。本人は決して年寄りなわけではない。戦闘でも広範囲な必殺技を持つていたり、情報処理の任務では一番早く処理が出来る重宝者。澪をテイマーとして持ち、戦闘時の彼女のアシストにはかなり感謝している様子。クールで思った事をすぐに言わない澪の性格がどこ

か自分に似ていると思った事があり、無意識に漫を大事にしようとしたりする。

ネットワーク管理者

> i30883 — 3941 < ・大神おおがみ 結ゆづ / 私

ネットワーク管理者の一人、闘士。性格はぼんやり&クール。リアルワールドとデジタルワールドの均衡を保つ為、デジタルワールドから管理している。

パートナーは『デュラハモン』。現在はデジタルワールドで生活し、『カンヘルモン』とは無言で仲がいい。

> i30884 — 3941 < ・デュラハモン（オリジナル） / 俺
首なし騎士の逸話のデータが集められたデジモン。

逸話であるデュラハモンの姿を唯一確認した存在として、大神にはその力を貸した。姿を認識されない事を繰り返してきた彼にとつて、大神の眼力は救いの手となり、人間である彼女と共に行く事を闘士となり誓う。

> i30885 — 3941 < ・直樹なおき 悠史ゆうじ / 俺

ネットワーク管理者の一人、ティマー。基本はダルイ雰囲気ダルイ雰囲気の現在自営業の団子屋亭主。事前に戦略を立てるのは苦手だが、戦場で戦略を立てるのが得意。何故かパソコン以外の機械に弱い。

パートナーはタクティモンで、大神とは違いリアルワールドからの管理を行っている。

> i30886 — 3941 < ・タクティモン / 私 俺

「蛇鉄封神丸」と呼ばれる無双の剣を持つ武人デジモン。策略家であるが、戦闘以外の日常生活はとてつもなく抜けている。刀や武器を集めたがったり、障子や畳などの“和”が好きであったり、とに角そういうことへの興味が暴走する。

悠史とは5年の付き合いで、コンビとしてはそこそこ上手く出来上がってる。普段はボケになりがちだが、戦闘になると一変し、その場の状況戦略型の悠史と合わさり本来の能力が発揮される。

> i30887—3941< ・カンヘルモン（オリジナル）/俺龍と獣人（狼）の姿をした龍獣型デジモン。

リアルワールドに繋がる電波を受けたのがきっかけで直樹と出会い、直樹への通信や大神のアシスト等、何処からともなく手助けをしたりする。

管理者であるかと聞かれると、本人は興味がないらしい。

デジタルワールド勢力

四聖獣；

東西南北それぞれの方角を護り、輝く4つの目と12の電腦核を持ち、神のごとき力を持つといわれる4体の究極体。最も神に近い存在と崇められている。ネットワークを守護するロイヤルナイツとは互いに信頼する関係ともいえる。配下には3体ずつの十二神将デーヴァがいる。

《メンバー》

北・シエンウーモン

【ヴィカラーラモン（亥）、クンピラモン（子）、ヴァジラモン（丑）】

東・チンロンモン

【ミヒラモン（寅）、アンティラモン（卯）、マジラモン（辰）】

南・スーツエーモン

【サンティラモン（巳）、インダラモン（午）、パジラモン（未）】

西・バイフーモン

【マクラモン（申）、シンドウーラモン（酉）、チャツラモン（戌）】

ロイヤルナイツ；

ネットワークセキュリティの最高位、或いは守護神と呼ばれている13種類の聖騎士型デジモンである。召集場所はイグドラシル。イグドラシルは場所であり、主君ではない。(以前は主君であったが、NDW移動後に反乱があり、それ以来ロイヤルナイツを指示せず密かにデジタルワールドを見守っている)

ネットワークの守護は、基本的に自己の判断で行う。何かあった場合には四聖獣からの申し出があり、それも仕事としてこなす。

ロイヤルナイツの各々で四聖獣との相性や馴染みがあり、仕事を頼まれる者が大体決まっている。

《メンバー》

> i31797 — 3941 < ・オメガモン / 私 / 俺

ロイヤルナイツ第二のリーダー的存在。取り敢えず一番頭が固い。デジタルワールドの秩序の為ならばどんな事でもいち早く行動する。イグドラシルが存在した頃よりも物事の善し悪しを自分で考えるようになった。

一見冷たい言動に見えるが、心の中では信頼を置いた者には敬意を払っている。

> i31798 — 3941 < ・デュークモン / このデュークモン / 俺

ウィルス種の聖騎士型デジモン。オメガモンとは信頼が厚い盟友で、一緒に行動する頻度が一番高い。自分に嘘が付けない性格で、主君であつても間違っていると思つたらそれを正そうとする。

七大魔王のベルゼブモンとは因縁がある。

> i31804 — 3941 < ・マグナモン / 俺

アーマー体でありながら究極体にも匹敵する力を持つロイヤルナイツ。至極真面目な性格で、どんな状況であっても自身の決断は決して揺るがない。ロイヤルナイツ守りの要。

小柄でアーマー体であることに少しコンプレックスを感じている。

> i31805 — 3941 < ・ロードナイトモン/私

デュークモンと同じくウィルス種のロイヤルナイツ。美しいものが第一で、戦い方であるうが振る舞いであるうが人道であるうが、自分の考える“美しさ”に反するものは全て見下す。しかし美しいと思ったものは正直に誉め、それを大事にしようとする。

“美しさ”を求める故、自分がウィルス種である事がどうしても納得出来ない。

> i31800 — 3941 < ・アルフォースブイドラモン/俺

ロイヤルナイツの中で一番元気があり、活気があり、陽気な天然さん。どこか抜けたように見えるが、口交渉は一番上手いと言える。

空中戦が得意で、神速のスピードを誇る。

フレンドリー気質により自分の名前が長いので、日々どんな短い呼び名で皆に呼んでもらおうか考え中。

> i31799 — 3941 < ・アルファモン/俺

ロイヤルナイツ“空白の席”と言われるロイヤルナイツの抑制役。

普段は旅をしたりフワフワしたりしているが、任務があればそれなりにやっている。やる時はやるタイプ。

気の抜けた雰囲気を持っていたり、かと思えば急にシビアになったりと切り替えがすごいひと。

> i31801—3941< ・クレニウムモン/私
ワクチン種でありながらウィルス種とよく間違われる残念なひと。
そしてロイヤルナイツ一番の苦労人だが、礼節をわきまえ、説得するなら一番話が分かる。特に礼節をわきまえている相手ならば、持ちかけた話はちゃんと最初から聞こうとするし、話の途中で手を出す事もない。外見で彼の性格を知らずに攻撃したりするとえらい目に合う。

> i31802—3941< ・スレイプモン/私
極寒地域で古代遺蹟を護るロイヤルナイツ。よってかなり寒さに強い。ロイヤルナイツ内では一番我慢強く、気長に物事を観察できるタイプである。何事も見据えた意見が出せる為、他人にも自分にも厳しい面がある。（結構的を得てる為、中々反論する者はいない）
普段は遺蹟を護っているが、他のロイヤルナイツ同様の仕事もする。

> i31803—3941< ・ドウフトモン/某
人型、獣型のモードチェンジを持ち、個性的なロイヤルナイツを統率するリーダー的存在。
基本、力が正義という信念な為、力で物事を解決しようとする傾向がある。
それ程大きな差はないが、モードチェンジにより少し性格が変わるようである。獣型の方が全体的に穏やかな考えになり、他人の意見をよく聞くようになる。（人型特有の自己主張が減った）

七大魔王；

悪魔・暗黒系デジモンの頂点に君臨する七体の魔王型デジモン。
ダークエリアを拠点とし、団結力は薄い。
実は意外と平和な事をしてたりする。

《メンバー》

・デーモン/俺

憤怒を司る七大魔王。怒りっぽいというか顔が怒っている。その為
普段はローブを被り落ちついた雰囲気醸し出そうと頑張ってる。

(しかしながらよく怒る)

バルバモンとはなんとなく仲がよさげ。

・リリスモン/私

色欲を司る七大魔王。同士や悪魔系のデジモンには女神と言われる
程優しい。敵である限りは彼女の優しさが分かる事はない。彼女の
前で“おばさん”は禁句。

七大魔王の中では紅一点で、誰とでも交流がある。

・ルーチェモン フォールダウンモード/私

傲慢を司る七大魔王。俺様様、いや、私様様。言葉を匠に操るので、
知らない間に彼の術中にハマる者も少なくない。完全体でありなが
ら力も強く、デジタルワールドで絶対に会いたくないものの一人。
基本、笑顔が絶えない。

・バルバモン/儂

強欲を司る七大魔王。欲、欲、欲、と目先の事しか見ていない事が
多々ある。自分と同じように強欲な者には感心を示す事も。他人の

「強欲が悪い」とか言わないのがいい所。
そして“ジジイ”は禁句。デーモンとは何気に仲がよさげ。

・ベルフェモン/俺

怠惰を司る七大魔王。スリープモードで寝ている事が殆どだが、レイジモードでも寝ている事も少々見かけられる。レイジモードではよく暴れるようだが、落ちつけば話す事もあり、気を許した者であれば撫でると喜ぶ。

【オリジナルデジモンデータ】

> i30890 — 3941 <

・デュラハモン【Durahamon】

究極体 / アンデッド騎士型 / データ種 /

首なし騎士の逸話のデータが集められたデジモン。この逸話はデジタルワールドでも誰もが知る逸話で、「コシユタ・パワー」という首無し馬に乗りデュラハモンが死を予言しに現れる、と広められている。よってデュラハモンの姿を見ると死が訪れるとも言われている。

実際デュラハモンを見た者はいないとされており、逸話でしかない。逸話上でも姿が特定している訳ではなく、広められているその姿は多数あり、デュラハモンに会っていても気づかないのが現状である。逸話は地域により若干の違いがみられる。

デュラハモンの首は通常普通に付いているが、戦闘時になると首は脇に抱えるか、自身で操る黒い影により保護される。

影で創られた鎌の形をした武器は大きさは変幻自在で、天地を切り分ける事も出来ると言われている。切り裂かれた空間の先には“死”が待つており、空間ではどんなデジモンもそこでデータが初期化され、天地の一部となる。

逸話では恐れ多く伝えられているようだが実際は平和主義者なため、余程の事がない限りデュラハモンが誰かの“死”を予言する事はない。

> i30891 — 3941 <

・カンヘルモン【Canhelmon】

究極体／龍獣型／データ種／

龍と獣人（狼）の姿をした龍獣型デジモン。獣竜型とは少し異なる。

ふらりと現れてはふらりと消える事が多いが、利他主義者である。好戦的だが、無意味な戦いは好まない。

ロイヤルナイツと手合わせしたいと思っていて、ロイヤルナイツ内での竜型であるエグザモン、飛竜の力が強いデュナスモンには特に尊敬の意を抱いている。

一度アルフォースブイドラモンとは会った事があり、彼には飛竜と思われるが、本当は飛竜ではなく水龍の力を持っている。竜の眷族として飛行能力は優位だが、彼の竜の能力は水上・水中で最も発揮する。

地で発揮される狼の能力は、地を盛大かつ俊足で走る事ができ、地を蹴る力が最も強い。

地に踏みつけられれば一発で踏みつけられた箇所が消え、蹴りを入れられれば一発でその箇所がデータ分裂を起こすほどの脚力である。自身の2つの尾ですら戦闘では活用し、締めつけたり叩きつけたりと様々な使い方をする。

胸の水晶は“龍神玉”と呼ばれ、中で水と風がの竜巻を作り渦巻いている。「龍は滝を昇るもの」というカンヘルモンが水龍である事の象徴でもあり、必殺技の「トルネード・ストーム」は水と風が竜巻と暴風を起こす。

本来トルネード・ストームの攻撃範囲は大規模であり、“龍神玉”はその大規模な必殺技を抑える為のものである。しかしカンヘ

ルモンが荒れている時は、“龍神玉”の抑止が効かない事もある。

水龍の力が水を、飛竜の力が空を、獣の力が地を、それぞれの力が合わさり自然を大事にする信念が強く、自然を壊す者には容赦はない。

宣伝広告。

それを作るために開いたパソコンだった。しかし広告は作る途中で置き去りにされ、画面の下に追いやられる。

「セキュリティが弱まってるだって……？」

ウィルスの影響か？それとも此処にセキュリティが不在なだけか？

「どっちにしろコレはマズイぞ……」

ほらみる、と言わんばかりに大事なデータがかき消されている。このノート型の小さなパソコンではデータが空っぽになるのもう、すぐ。あつという間だ。

兎に角本部に行くしかないと思いに机にパソコンを放ったまま立ち上がった。

「おい！ タクティモン。今すぐ本部に飛んでくれ」

もう5年も着ているのに慣れない制服に腕を通す。

「午後からは臨時休業か」なんて思い溜息が出たが、それも仕方

ない。よくあるっちゃある事だ。

それでも常連のように来てくれるお客様には感謝しないとな。

「今すぐか？ 承知した」

俺の相棒はタクティモン。未だにこいつに飛行能力がある事にとこか納得出来てない俺は、空高く上がるタクティモンの背中に乗った。

データの残骸だと思っていたデータは実は分裂しただけのデータだった。

これには誰も気づかなかった。否、誰もが自分の力に奢っていたのだ。

膨大なデータ量。まさかイグドラシルに召集したこの時を狙われるとは。

それにしても何故この場所が分かった？ この場所を知っている者は我らロイヤルナイツと四聖獣のみ。

誰かの後を付けてきたとでもいうのか？

「オメガガモン！」

「デユナスモンか、大事ないな？」

「ああ、問題ない。それよりも、だ……」

「ここを知られて帰すわけにはいかん」

「それもそうだ。しかし……」

「？ さっきから何だ、その不満げな返事は？」

「……。ここだけではないという情報が入った……」

「まさかつ、」

「そこのお二人さん！ 大丈夫かい?!」

「「アルフォースブイドラモン！」」

「どうやら大丈夫みたいだね。それよりもさっきデユナスモンが言った情報の続きだ」

「ここだけではない、という事はここで屯たむろってる場合じゃないという事だな」

「そうそう、それでねえ。俺はそっちの場所を抑えた。

見た所こっちより随分場所が広いし、敵も分散してる。

こっちは……究極体になって御出ましだけど、向こうは成熟期がいっぱい、いっぱい。

あの様子だと進化するつもりもないらしく、データばかり食ってるよ」

「それで、二手に分かれるという事か？」

「デユナスモン正解。悪いけど、デユナスモンは俺に付いてきて欲しい。後はエグザモンとクレニウムモンに来てもらうけど、いいかいオメガモン？」

「ああ、構わない。そちらは任せたぞ」

「了解」

アルフォースブイドラモンがデユナスモンを連れて二人を呼びに飛んだ。四人が別の場所に向かい、残るは六人。

再生と修復を繰り返す敵の前に、俺達は確実に体力を削られていたのだった。

「…………で、何で俺まで付き合わされてんの？」

不機嫌そうな顔…………というよりは眠たそうな顔をしてファーストフード店に居座ってるのは、國土深という二陣中学3年の男の子。

そして彼を付き合した張本人、同じ中学3年の西ノ宮遷。

「新しいカード出たから」

「……」

それだけか、とでも言いたかった深はその言葉を喉で止めた。
ま、自分も欲しかったからいいか、と思い直して。

「カードの出は？」

「まあまあ順調」

「あー、そう」

単調な会話はいつも通りだが、漣の機嫌が少しだけ嬉しそうな感じがする。

漣は買ったカードを全部見終わると、ガサゴソと鞆からノートパソコンを取り出す。

「譲ってもらったんだ、小さいの」

「へえ、いいな」

深がひよいと身を乗り出すと漣はパソコンをそちらに向ける。
デスクトップにはデジモンの壁紙。ほんとに大好きなんだなあと思う。

デジモンと言えば男の子対象のものかと思っていた深だが、最近ではカツコイイのやら複雑な設定やらでデジモンも女の子から上の年齢層にまで受けている。

現にクラスメイトの女の子でもハマっている子もちらほら見るし、ちよつと上の年齢層の女の人なんか凄いもんだ。

「で、何。パートナーにするならロイヤルナイトの誰かがいいってか」

デスクトップに飾られているのはロイヤルナイトの面々。

オメガモンからデュークモン、最近少しあちこちで顔を出し始めたアルファモンやクレニアムモンまで、見事に現在公開されている11体のロイヤルナイトがカツコよく描かれている。

「そうだな……ロイヤルナイトはカツコイイよね。でも、パートナーデジモンは誰でもいいよ。」

デジモンがここに存在するっただけで十分だ」

澪はあまり高望みしないタイプの人間だった。

元々叶いもしない願いなのだど割り切っているのかもしれない。

でも人種で分けるなら、澪は絶対『サツパリ現実型』だと深は思う。

「そうか……デジモン、本当にいるといいよな」

ちゅーとコーラを飲み干しながら、俺はパソコンを操作する漫の手をじっと見ていたのだった。

広い広い荒野には、無数のデジモンが散っている。

そんな光景をある者は横に首を振り、ある者は溜息をし、ある者は何も言わず見据えている。

「また増えたのか……」

アルフォースブイドラモンがそう呟いたのを真後ろにいたクレニアムモンが頷くように聞いていた。

「増えただけなのだろう。消せばよい、問題ないぞアルフォースブイドラモン」

クレニアムモン自身もフォローのつもりで言ったのだが、やはりその数は目が痛くなる程に今も増え続けている。

「見ていても仕方ないな。半分……俺が消そう。それで大分視界も良くなるだろう」

大きさはロイヤルナイト随一のエグザモンが大きく羽ばたいた。

荒野がこれ以上ない荒野になりそうなエグザモンの一撃は、やはり予告通りその敵の数を半分に減らす。

「流石……“竜帝”。規模が違うな」

同じ竜の眷族であるデユナスモンが感心の言葉を代表した。

これではもう一発エグザモンにやってもらえば終わりではないか？
？ と思ったが、そうはいかず敵は増える。

「一体どれだけ湧いて出て来るのか……」

キリがない、と言った瞬間、3体も敵の排除に向かう。

随分と戦った気がする。そして随分と減った気もする。
しかし、4体の身体を違和感が包んでいる事も確かだった。

（何だ……身体がおかしい）

それにいち早く気づいていたのはクレニアムモンだった。自分の手を見つめてみても何も分かりはしない。

しかし何かがおかしい。

（この敵に触れるだけで……まさか）

一度や二度なら感じる事はなかっただろう。その違和感は明らかに同じ敵を何度も触れているからだ。

「オイ皆！ 敵に触れ過ぎると危険だ！ これ以上長期戦は不要、荒れた地は後に修復に手をかける。一気に終わらせよう！」

クレニウムモンの声掛けの意図をすぐに察した3体は頷き、各人広範囲に有利な技を繰り出す。

その矢先の事だった。

体の異変が現れたのは

敵の全排除完了と共に4体の体はその場から消えた。

「はぁ……………はぁ……………」

先程と同時刻、イグドラシルに姿を表した敵は同じ時間に消滅した。

そして消えたロイヤルナイツの一人は、イグドラシルに戻ってきた。どういう訳か、かなり息を切らしている。

「クレニウムモンか。いつ帰った？」

気配もなくいきなりその場に戻ってきたクレニウムモンに何気なしに質問したつもりだった。

そう聞きながらクレニウムモンに近寄ったスレイプモンだが、絶え間なく息を切らしている異変に気づく。

「どうした、そんなに急ぐ事もなかっただろう」

「ここは……イグドラシルか……？」

その質問に皆がクレニウムモンを見る。

「？ ああ、どうした？ 何かあったのか？」

スレイプモンが不思議そうに尋ねたが、クレニウムモンは目を見開き啞然とした態度だ。

「私以外は？ 帰っていないのか？」

意図の分からない質問ばかりで、ついにロードナイトモンが痺れを切らす。

「帰っていない。お前と一緒に行動していたのではなかったのか？」

クレニウムモン自身もまだ状況が分かっていない。
そして片言で呟くしかなかった。

「消えた。私も含め他の3人も、あの場所から一度消えたのだ」

事実は、意図の分からないものだらけでロイヤルナイツ達は個々で数少ないクレニウムモンの発言から考えを巡らし始めた。

ネットワーク管理局本部。

管理者は数えるほどの組織だが、今は彼一人しかそこにはいない。彼とそのパートナー、タクティモン。その彼の名は、“直樹悠史”。

「やっぱりおかしなことになってやがる」

こちらのデータは無くなっていなかった。

普通のパソコンと違い、デジタル世界専用で作られているお陰でデータが無くなるという被害は避けられたようだ。

「増殖したウイルスと進化したウイルスか……タクティモン、これはデジタルワールド内でデータを食いたかっただけだと思うか？」

セキュリティは弱まっていたが、正常に戻っている。一時のウィルスの所為ならばこれでいいのだが、悠史は納得していなかった。

何故か、それはデジタルワールドのセキュリティとも言える二つのデータが消えていたからだ。

「セキュリティ……ロイヤルナイツの2体のデータが消えている。

さっきのウィルスの所為で消されたのだろうか、それと共に魔王系の大きなデータも一つ消えている」

「ロイヤルナイツが？　しかしウィルスは排除したのだろうか」

「ああ、排除は完全にした」

「消えたデータはDELETE（削除）かTRANSFER（移動）

か？」

「ん？ TRANSFER？ まさか……」

「こちらに移された可能性がない事もないだろう」

「成程……」

「うむ。意図は分らんが、ネットワークセキュリティをDELETE出来ないと判断し移動させたか、だな」

「少しばかり調べる必要があるな……」

タクティモンの助言に直樹は頭を働かせ始めた。

セキュリティ 消えた二つのロイヤルナイツがDELETEではなくTRANSFERしたと祈りながら。

2話 『本物』 1 p .

とあるファーストフード店。未だにパソコンを広げ居座る二人は、パソコンの調子が悪くなってきた事に気が付いた。

「ねえ、何か動きが遅いよ……」

「うん？」

ネットを開くと動きが遅い。ノートパソコンで元々そんなに高性能でもないのだから、多少は遅くても仕方ないと思ったが、

「……遅くなってきてるな」

フリーズしそうなくらいに遅い。

ネット画面を消せばいいんじゃないかと言ってみれば、遷はネット画面を消してみる。

それでも次の動作をするには反応が遅かった。

「故障？」

「昨日までは普通だったのか？」

「うん」

「ウイルスが入ったとか」

「バスターは入ってるけど……」

「バッテリーもなくなってきたな。ウチにくるか？」

「うん、そうする。ありがと」

「ん」

深の家でパソコンを見る事になり、パソコンの電源を切ったのだ。
った。

データを食われていた、のではない。
データを変えられていた、のだ。

体の違和感はデータが移動用に小さくされていた所為だった。
しかし今は元に戻っているデータ。よって退化もしていない。

「うむ……そしてお前はイグドラシルに移動させられたという事か」
「そのようだ……」

やっと状況の把握ができたのか、クレニウムモンは先程起きた事の分析を始めた。

そして他のロイヤルナイツにそれを伝えた。

消えた残りの3体はどこにいるか分からない。だか起きている事はきつと自分と同じだろう。

「何が目的だったのか……」

ドウフトモンがそう言ったが、それは誰にも分からない事だった。何せその敵はもういない。

それも移動させられたのは荒野に向かった4体のみで、イグドラシルにいた自分たちは何もなかったのだから。

「今後、何か影響があるようだったら調べよう。今すぐには分からない事だらけだ」

アルファモンの言葉により、その事態は一旦保留となった。そしてロイヤルナイツの仕事が増える。

消えた者達の搜索と、今後の敵の影響、そして目的。

だが早々に一つの情報が入ったのは、ダークエリアからだった。

深の家に変えると再びパソコンを広げる。
広げると電源を入れる、しかし電源が入らなかった。

「あれ……」

「どうした？」

「電源が入らなくなってる」

「コンセント挿してるよな。ほんとだ、付いてない」

溲の頭の上には「？」がいっぱい付いている。正直深の頭の上にも「？」が付いている。

「俺のパソコンはどうだろ」

「うん、どじっ？」

「……付かない」

「うそ……」

「うん……うわっ!？」

広げた二つのパソコンが同時に光る。そして画面には見たこともないマークが点滅していた。

「な、なんだこれ……!?!」

「変なマークだ…」

ブツン

「!?!」

部屋の電気が全部落ちた。だけどパソコンだけは起動している。

「ちよつ、停電!?!」

「だったら何でパソコンだけは付いてるの!?!」

「わっ分かんねえよ!?!」

「わっ、深!?! きゃっ!?!」

パソコンの画面が激しく点滅を繰り返し、赤いマークがこちらに向かっている気がした。

バチバチと音が立ちそうなくらい光る赤いマークは、黄色い光を照らし出し、まるで狙ったかのように二人を直撃する。

「くっ!?!」

「きゃあ!?!」

あまりの光の濃さに二人は目を閉じた。そして光が包み込む。その瞬間、画面の向こうから光と共に生き物が放りだされる。

「何だっ!?!?!」

深が近づこうと身を出したら光は消え、パソコンの前には2体の生き物が倒れていた。

一匹は猫のような姿、もう一匹は恐竜のような姿。

「まさか……」

「これって……」

澁と顔を見合わせる。それは、絶対にこの世界に存在しないものを見ているからだ。

「」「デジモン……!」「」

メジャーなデジモンではなく、マイナーと言えばマイナーな成長期デジモン。

レオルモンとドラコモン。

二人は倒れてる2体にそっと寄りしてみる。恐る恐る、動かないかどうか、確かめながら。

あと数十センチというところでレオルモンがピクリと動いた。

「「っ！！？」」

二人は驚き顔を見合わせる。

しかしそれ以上の動きはなかった。少しばかりほっとし、二人はそれ以上近づく事を止める。

触ろうとしたのだが、近くにあったタオルを濡が手に取ると、2体にそっとそれを掛ける。

そして静かに、部屋を出たのだった。

一通の情報が入った場所はダークエリア。

「ダークエリアだと？」

デュークモンがあからさまに不服な声でそう言ったが、オメガモンが続けて入ってきた情報を読み上げる。

「ダークエリア、現在1体のデジモンのデータが消えた。消えたデータは究極体、七大魔王ベルゼブモン。」

「!?!? ベルゼブモンだ?!?!」

先とは打って変わって声を荒げたデュークモン。彼はその消えたデジモン、ベルゼブモンとは多少なりとも因縁がある。

声を荒げた理由はベルゼブモンの身を案じてか、それともそんな事があるはずないと驚きの表明か。

どちらにせよこのままではこのダークエリアの搜索を、誰かを押し切ってもデュークモンが行くと言いそうな勢いだ。

「落ちつけデュークモン。まだ報告は終わっていない」

「あ、ああすまない」

抑止したのはオメガモンだったが、淡々とした口調で残りの報告も終わらせる。

「消えた時刻はほんの先刻。我々が敵と戦っていた時刻と被る」

「敵がいなくてもあいつらと同じ事が起こったという事か？」

「うむ。そういう事になる」

ドウトモンは考え込んだが、やはり現場を見に行かなければ分からない、という意見を出した。

「敵は、本当にダークエリアにはいなかったのだろうか」

「分からん。ネットワークの検索にも引っ掛からなかったし、なにより四聖獣達からも連絡は入らなかった。いなかった可能性が高いと思われるぞ」

「だとしたら何故……」

マグナモンの疑問は皆の疑問だった。だが「いない」と言い切ったロードナイトモンは自分の力も、自分たちの力も、そして四聖獣も信用している。

「ともかくダークエリアに今すぐ向かう。何かあるか分からない。これ以上人材は割かないほうがいい。デュークモン、ドウフトモン、お前たちが行ってくれ」

アルファモンの指示により、デュークモンとドウフトモンはダークエリアに向かうこととなった。

早急にイグドラシルからダークエリアへ。

暖かい。しかし、体が小さい気がする。

そう感じて目を覚ましたのは、見知らぬ場所だった。

「？ ニジは……」

デジタルワールドとは違うというのは直感で分かった。横に寝ているのは明らかに成長期デジモン。

まさかとは思ったが、そいつを起こして聞いてみないと分からない。

「おい、起きる」

小さくなった体でその体の揺る。
掛けてあったタオルがずれ落ち、暖かさが減少した。

「ん……？」

「起きたか」

「お前は……」

「デユナスモン、だった」

「……まさか……」

「確認だ。お前はエグザモン、だったのか？」

「ああ、だった」

「そうか……」

互いに退化したらしい事を確認し合った俺達は、ふと横に置いてあったパソコンを見た。

「……？ ロイヤルナイツ……？」

「そのようだな……」

画面には俺達が映っている。どういふ訳か、誰がこんなデータを欲しいと思ったのかは謎だ。

デジタルワールド内では俺達ロイヤルナイツは脅威の存在だと思われがちだからだ。

そうかと思えば足音が聞こえてきた。誰かが来る。

こんな体で何が出来ようかと思いつつも、やはりロイヤルナイツとしてのプライドは退化しても失くさなかったようだ。

2体で息を潜め、近づく足音を慎重に聞いた。何やら話し声も聞こえて来る。

「様子見るとかいいけど……さっきのさっきだぜ。早すぎないか？」

「え、そう？ だって下にいても暇だもん」

「……あのなあ……あれだけカードゲームって引っ張っという暇ってなんだよっ！」

「深弱い」

「ゲームしねえから俺！ 観賞用で集めてるから俺！」

「ふーん、あそ」

「……」

何だこの会話は。警戒するような程の者が本当に来るのだろうか。

そんな怠慢な考えがよぎったが、モチベーションは何とか保った。

「開けるよー」

声の主が部屋の扉を開ける。

その瞬間、俺達は技を開く扉に向けて撃った。入る前に「開ける」などとわざわざ言うヤツがいるのか、と腐抜けたヤツだと思いがら。

「って危なっ！！！」

「きゃあっ！！！」

扉が開き、間一髪技を避けた者達を見る。

「！？」

デジモンではない姿。

俺達の思考は全く付いてきていなかった。

デジモンではない姿。デジモン以外の生命体。

それは、ニンゲン。

3話 『ダーク&ロイヤル』 1p.

一言言っているか？

「ひょひょ」

その一言をさっきから何度言っただろうか。いや、実際つざいから何度言ってもいいだろう。

「「べつベルゼブモン様あ！」「」

ひょひょこ付いてくるこいつらは、何が嬉しくて俺に付いてくるんだ？

そもそも何だ、ベルゼブモン“様”ってよオ。俺がいつお前らの頭になつたんだよ？ え？

「あ あ ーもう、てめえらさっきから何なんだよ！ 何で俺に付いてくるんだ！？ ああ！？」

少しビクついて俺の怒鳴った事を聞いていた数匹のデジモンだが、今にも泣き出しそうだ。

っておい。お前からこのダークエリアに住んでるウィルス種デジモンの類じゃねえのか！？ それなりに度胸とかあるんじゃないのか

!?

「だって、俺達、ベルゼブモン様の部下になりたくて、」

「俺は部下はいらねえ」

「誇り高き七大魔王！　ベルゼブモン様！　俺達は是非あなたに付いていきたくて！」

「他を当たれ」

「そ、そんな事言わずに部下にならせてくださいっ！！　ベルゼブモン様っ！！」

「そんなに部下になりたいんだったら他の上司紹介してやるよ」

「じゃなくって、俺達はベルゼブモン様の下に付いていきたくてですって！」

「じゃあ例えば俺の部下になって何するつもりだ？」

「えええつと！　世界制服！」

「俺そんな野望抱いてねえから」

「このダークエリアの支配者になって名を知らしめるってのはどうですか!？」

「それで、何すんの？　有名人になったつもりでいんのか？　却下」

「ではでは、七大魔王の中で一番強く！ 他の大魔王様達も従える！」

「それで、何すんの？ 他の奴らが俺の下に付いた所で楽しくも面白くもねえからな」

「ではではでは、そのまま他の大魔王様達を従えてロイヤルナイツ達を一蹴！ ってのは」

「してどうすんだ？ 俺にセキュリティやらせるつもりか？」

あああああ、もう何なんだこいつら。たまーに俺に付いて行きたいとかってヤツは見かけたが、こんなにうるさいのは初めてだ。

おあいにくと部下を持つとか、世界制服とか、興味も何もあったもんじゃねえ。

俺は好き勝手に生きていただけだ。他の大魔王は知らねえが、俺は群れるのは好まない。

その所為で“孤高の王”だとかなんだとか言われてるらしいが、そんなの勝手に付けてんじゃねえよ。

そもそもアレだぞ。“七大魔王”なんて固有名詞ですら俺は一度も名乗った覚えもねえぞ。コレも周囲が勝手に付けたものだ。

お陰で七大魔王とかって組織みたいなのに勝手に入れられるわ、集会があつたら顔出せとか訳の分からない事も言われるわ、見つかり次第ロイヤルナイツに追い回されるわ

もう面倒な事だらけの人生になっちまった。

まあ元々強い奴と戦うのは好きだし、ロイヤルナイツと戦う事も他の七大魔王とちょっとやり合う事も面倒な事はあるが嫌いじゃない。

でもこれは面倒だ。部下にしてやらなんやら付き纏われるのは何もない事がない。

何とかこいつらを避ける方法はないかと考えた。

「お前らよオ、俺に付いてくるとか何とか言ってるけど、それって自由がなくなるって事だぞ」

「「「「？」」」」」

「どんなに酷い仕打ちしても……どんなにこき使っても……自由なんて一切与えねえ。それでもいいのか？」

「ちょっと悪戯げに、というかは脅しをかけてニヤリと笑って見せる。」

「まあ、それでもいいってんなら、まずは進化してから出直してくる事だな。したら考えてやるよ」

脚に装備されているブレインヘーナを構えてもう一度笑ってみると、

さっきまでよく喋っていたこいつらが身を震わせた。

ま、成功ってところだろうか。

「」「」出直してきますー！！ ベルゼブモン様！」「」「」

綺麗に揃って一瞥してから、疾走でその場を逃げ去る姿を眺め、
ふうと溜息を付く。

「もうくんなよな……」

元来た道を背に、俺はふらりと再び歩き始めた。

この後自分が消える事になるとは知らずに。

三陣中学陸上部は、今日は休部。副部長の椎橋契はそのまま家に帰ろうとした。

「せつちゃん!」

しかし真つすぐ家に帰るつもりがそれを遮られてしまう。

「凜か……何だよ?」

「今日部活は?」

「今日は休部」

「じゃあじゃあカードバトル付き合って!」

「またか……」

「一回でいいから!」

「一回だけな。一回だけ」

契に声をかえた中国服が印象の女の子。石川凜は契と同じ中学である。

そして彼女はティマーである。

彼女がティマーであることを知っている者は少なく、彼女のパートナーを見た者も勿論少ない。

契が彼女のパートナーを見た時は、自分にはパートナーがいないもののデジタルワールドが存在する事を知った。百聞一見に如かずというやつだ。

誘った彼女の家に向かい、早速カードバトルを開始する。凜の隣にそのそ歩いてきたのが例のデジモンだった。

「赤いワニ……」

「ワニじゃない、リヴァイアモン！」

可愛いでしょーと主張する凜の可愛いの基準はどうなっているのだろうか。この赤いワニを可愛いと表現する女の子はこの世に何人いるのだろうか。毎度この二人を見るたびに契はそう思う。

「じゃあ始めようー！」

互いの手持ちのカードをシャッフルし、赤いワニ……リヴァイアモンを横目に契はバトルの一戦目を始めたのだった。

一戦目が終わりもう何度もカードバトルをしているが、契が最近

気付いた事がある。

リヴァイアモンは話す事をしない。

「がああ」や「うがあああ」という雄たけびは聞いたことがあるが、話している所を見た事はなかった。

そしてリヴァイアモンは本来相当の大きさであると公式では言われている。

リヴァイアモン自身の大きさの調節しているのだろうか……想像しているよりもこのリヴァイアモンは小さいのである。

(七大魔王のリヴァイアモンだともっと大きいのか……)

完全にこのリヴァイアモンと七大魔王であるリヴァイアモンを別物と考えている契。おそらく凜もそう思っている。話す事もしない、もしくは出来ないのか、このリヴァイアモンにデジタルワールドの事を聞くのは無意味に等しい。

デジタルワールドの事を知りたい。

本物のデジモンがここにいるというのに……何つーもどかしさだ、なんて思いつつも凜の隣にドスンと座っているリヴァイアモンを見る。

(やっぱりデジモン……)

ほんの少し凜を羨ましく思った。

ダークエリア

ここに向かったのはデュークモンとドウフトモンである。

ダークエリアの入り口はどうにも気味悪く、入るのも嫌になりそうな場所に思えた。

それはウィルス種のデュークモンであつてもだ。

やはり“聖騎士”と言われるだけの事があるのだろうか。ウィルス種であるうがその意志は強い。

「この居心地は何度来てもいいとは言えんな」

ドウフトモンがつい本音を言ったが、デュークモンは少し怒りが混ざつたように返す。

「当たり前だ」

明らかにイグドラシルを出るときから機嫌はよくなかつたデュークモンだが、ドウフトモンの一言でデュークモンの機嫌がまた悪くなつてしまふ。さっきの言葉は失言だつたとドウフトモンは苦笑し

た。

七大魔王はダークエリアの深層に各城……のような各エリアを持っている。

そんなダークエリアの深層にベルゼブモンだけは自分のエリアを持っていなかった。それは彼が“群れるのが嫌い”という性格だったからだ。

この世の支配欲もなければ、部下を持ちどこかを襲うということもない。魔王型にしては特殊ともいえる。

だからこそ、ベルゼブモンは自由であり、自分の意のままに生きる。

いつも居場所が同じ訳ではないので探すのは困難だ。

そんなベルゼブモンと因縁を持ったのはいつだったか……デュークモンはそんな事を考えながら彼を探した。

「ベルゼブモンが消えたにしても……まだ何か足りない気がするな」

「七大魔王の住みかには静かすぎると言いたいのか、ドウフトモン？」

「ああ、入り口ではそんな思わなかったが、ここまで入り込むと何やら違和感があると思ってな」

「確かに……何か足りない気もする」

その“何か”とは、抽象的すぎて互いに分からなかった。
ダークエリアの深層、七大魔王の城、いつもの居心地の悪さ、

他に足りない何かは、此処から消えたベルゼブモンが知る事になる。

そしてダークエリア深層でデュークモンとドウフトモンが見つけた彼の進んだ形跡であるう足跡は、まだ新しいものだった。

4話 『これが始まり』 1 p .

リヴァイアモンが叫んだのは本当に急な事だった。

凧とカードバトルをしていて、山札から一枚カードを引こうとしたその瞬間だった。

「があああああああああああああああああああああああ

とてつもない音量で凧の家に響き渡ったその声。

家には誰もいなくて聞かれないで済んだけど、これは正直家の外にも聞こえているんじゃないかと心配にもなる。

けど、窓の外を見て気付いた。

凧の家の周りには霧が立ち込めていた事に。

「何か暗いな……霧のせいかな？」

「廊下の電気付けてくるよ」

「おー」

凧が部屋を出て廊下の電気を点けてみたが、電気が点かない。その後をリヴァイアモンは付いていく。

「あれ？ 電球切れてるのかな？」

2・3度点けたり消したりを繰り返してみたが付く様子もなく、

「があああああああああああああああああああああああ！

！……………！！」

「……………！！？」

低い鳴き声が家中に響いた。それと同時に家中の電気が消えた。

「ごめん！ 何か来るみたい！ リヴァイアモンが興奮しちゃって……………」

凜がリヴァイアモンを連れて廊下に出てきた。聞くと停電はこいつのせいではないらしく、リアルワールドに侵入してきたデジモンのせいじゃないかと説明してくれた。

「んで、どつすんだよコレ……………」

家から外へ出てみればどこも電気が消えていて街灯すらも街を照

らしていない。

そしてまた、リヴァイアモンが吠えた。

「……ちよっ……!!」

「ごめんって……!!」

音で物が壊れるんじゃないかと思うくらい大きな声。空気の振動もよく伝わる。

そんな声を見つけてか、はたまたその声で敵が近くにいる事を知らせようとしたのか、

「うっ……わ……?!」

俺達の周囲は霧がかかり背後には敵が迫っていた。

部下だなんだ言われて面倒事が過ぎ去ったと思ったら、また不運な出来事がやってくる。

七大魔王と呼ばれる“魔王型”に進化した俺。

けど。

進化して……進化して、そして待っていたのは退化。

オイコラ……ここは何処だ？　そして俺は何故、退化した？

小さくなった体は見知らぬ土地に放り出されていて、気付けば歩く事を止めていた。

そして気付けばここはデジモンならば一度は夢見る地、リアルワールドだった。

デジタルワールドでいつも通りフラフラしていた俺は、デジタルゲートってやつか？

よくは分らねエがそれが開いたらしく俺はその光に巻き込まれた。なぜ開いたのかもよく分らねエが、デジタルゲートが開く程の力がどこかにあつたらしい。随分と強大な力だったんだろうな。

ゲートの中で俺はデータを食われていった。恐らくそれが退化の原因か？

俺は進化にはかなりの時間を食らった。リアルワールドに来れた事は嬉しいが、正直退化してまで来たい場所じゃねえ。

『力が欲しい……！』

「あ？」

ふと聞こえた声。誰だ？ 俺と同じ事を思ってるヤツは。

欲しいのか、そんなものがあれば寧ろ俺が貰ってやるんだけどなあ。

霧の中、凜とリヴァイアモンが必死で戦っている。

狭い街中で、建物多いのでかなり戦いにくいらしい。時間は結構経った。

その時間の中で俺は何も出来なかった。仕方がないと思えば仕方がない事なのかもしれない。

「リヴァイアモン！」

デジタルゲートらしきものがずっと開きっ放しになっているせいで、敵が尽きる事がなかった。

だから次第に二人は限界を知っていく。

（俺も、力が欲しい……！）

強く強く想った。

誰かが戦っているのに、只見ているだけなんて有り得ない！

その想いの力は奇跡的に彼を呼んだんだ。

「……………あ？」

後から聞くと彼も俺と同じ事を想っていたらしい。

「ベ……………ルゼブモン……………？」

後ろで聞こえた凜の声。

「あ？ ってそこのニンゲン」

黒い人型デジモン、ベルゼブモンが俺に向かって歩いてくる。

「お、俺？」

「しかいねえだろ。で、力が欲しいのはお前か？」

「え、あ、ああ」

「ベヒーモス……………」

ジャージのポケットに視線をやったベルゼブモン。

「呼べるよな？」

ポケットに手を入れてみればベヒーモスと書かれたカードと凜が持っていたのと色違いのD アークが入っていた。

「力は貰った。だからお前にも貸してやる」

くるりとUターンしたベルゼブモンはガチャリと銃を構え一番前に立つ。

「そのワニ、あとは任しとけ。 おいニンゲン！」

「あ、ああー！」

「しっかり見とけよ。コレが俺の戦い方だ」

ニヤリと笑ったベルゼブモン。
ベヒーモスのカードを握った俺。

「カードスラッシュ！」
「ベヒーモス!!!」

二人に呼ばれたバイクは、空高くから姿を現したのだ。

場所は深の部屋。

今、深の部屋では2体のデジモンが目を覚ました。

自分が部屋の扉を開けたと同時に、いきなりの攻撃にウチは戸惑いは隠せなかった。

そりゃそうだ、こんな物理的な攻撃なんて未だ人生一度も受けた事はなかったんだ。

どこか恐怖心が出ていたのかもしれない。ウチは動けずにいた。

「お、おはよう」

そうやって先に動いたのは深で、顔は若干引きつっているが空いたままの扉の先に足を踏み入れる。

深が近づいたのに対し、2体のデジモンは警戒…というよりは混乱しているように思う。

「えっと、あんたちってデジモン……だよな？」

どんな質問だ！？

デジモンにデジモンだよなって、デジモンは私たちが呼んでる呼び名であってデジモンが自分たちのことをデジモンだと呼んでなかったら話を通じないじゃないか！

「……深……」

はぁ、と首を振って深を見ると、深は「？」というような顔をしている。

「え、何……」

「デジモン、だけども……」

「うん」

「それは私たちが呼んでる名前であって……」

「ん？ あ、そっか……じゃあ何て聞けば、」

「デジモンだ」

「「え」「」

二人の会話に入り込んできた“デジモン”。
その声は低く、デジモンのほうを見ると2体に混乱の目は消えていた。

「俺はドラコモン」

「俺はレオルモンだ」

ガラスに映っていた自分たちの姿を見ると成長期にまで退化している。

こんなに小さくなったのはいつ以来だろう。随分昔な気がする。こうなって感じた事だが、他者よりも膨大なデータ量を持ち、その羽を広げていた時間の方が遥かに長かったように思うのだ。

ニンゲン達がデジモンだ何だと話している間に俺の驚きは徐々に薄れていく。

デュナスモン（今はレオルモンだが）を見ると同じように落ち着いてきたらしい。

“あんたちってデジモン……だよな？”

そして先程ニンゲンの男性が聞いた質問を思い出す。ああ、ニンゲンも我らの事を“デジモン”と呼んでいるのか。

ニンゲン達の話の途中だったが、俺はそこに割り入った。

「俺はドラコモン」

するとデュナスモンが続く。

「俺はレオルモンだ」

「これが、俺達の出逢い。」

今日この時、全ての物語が始まった瞬間だった。

「くそつ。通信が拒絶されてるだど!？」

ネットワーク管理局本部にて、デジタルゲートがリアルワールドで開きつばなしになっていると情報が入った。

それはほん数分前の事。その地域やその他のデジモンに関する情報を調べようとデジタルワールド側へ電波を送ろうとした時だった。通信は拒否され、その上リアルワールドのデジタルゾーンに関する情報すら読めなくなってしまったのだ。

「焦るな悠史。被害はそれほどまでに大きくない筈。誰か知らずのテイマーが戦ってくれているだろう」

事の状況を全部見透かしているかのように、平然と椅子に座りそう言ったタクティモン。

直樹の言葉を軽く流すと、タクティモンはデジタル反応を示す大画面の前に立つ。

「直にデジタルゲートは閉じる。戦況は優位だ」

デジモンの事はデジモンしか分からない。タクティモンが言うてる事のみが直樹に分かる事だった。

それから10分後にデジタルゲートは閉じ、通信回線は元に戻った。

「どうやらゲートが発生した事による通信拒否だったようだな」

「そうだな。はあ……今日は不思議な事が多すぎる。デジタルワールド側からも調べてもらわないと」

「うむ」

繋がった通信回線を使い、直樹はデジタルワールドへ電波を送る用意を始めたのだった。

イグドラシルにて。

デュークモンとドゥフトモンがダークエリアへ搜索に向かい、消えた3体はまだ戻ってこない。

しかし仕事量は多く、見るからに人が足りない。

今ロイヤルナイツが行っている仕事はデータの整理。働き者のデユナスモンはいないし、データ整理が一番早いエグザモンもない。その上仕事熱心なクレニウムモンには疲労の色が見える。

この人手が足りなさに、普段は極寒の地でそこに送られてきたデータを整理しているスレイプモンも、今は持ち場を離れイグドラシルで仕事をしている。

皆が仕事に集中している中、イグドラシルの衛星がこの世界でない電波を受信した。

せつせと仕事を進める重い雰囲気の中、それに気付いたのはマグナモンだった。

「何かデータが送られてきているぞ。読んでもいいか？」

「ああ、読んでくれマグナモン」

手が放せないのか、オメガモンは見ることもなく返答した。

「これは……オメガモン、送信された場所が不明だ。開くのは危険ではないだろうか？」

「何だつて？ もしや例のデジモンの企みか」

「だとしたらこれは削除するべきだな」

「しかし、ウィルスは仕込まれていなさそうだ」

休憩がしたくてか、ロードナイトモンは席を立ってマグナモンの傍まで移動した。そして受信したデータを手に取り、デジコードがぐるぐると固められたデータの表層を探っている。

「開いても問題ないと思うが」

ウィルスの量や性質をよく分析出来るのは彼がウィルス種だからだ。自分がウィルス種であることに不満を抱き、執着している分、ロードナイトモンはデュークモンよりもウィルスに敏感である。

「開くだけ開いてみるか？」

アルファモンがデータを見やりながらそう言って、ロードナイトモンに頷く。

「差出人は……」

デジコードを開くと帯状に分解され、ロードナイトモンはそれを読み上げていく。

「D”I”B”R”本部……“ディブレ”、か？」

聞いたこともない名詞で早くもロードナイトモンは戸惑う。

「『 検索願ひ / x x、17:20頃、リアルワールドにてデジタルゲートが開き大量のデジモン反応が見られた。ゲートが開いていた時間は10分程で、その間は通信不可。開いたゾーンとそ

のゲートに関する情報があれば連絡を頼む』」

「これはまさか……」

「リアルワールドからの通信か!?!」

アルファモンに続きマグナモンも驚きの声を隠せない。

「DIBR本部? タイマーと呼ばれる人間は見かけた事はあるが、そんな組織的な名前は初耳だ」

「うむ。それにそのデータの内容だと只のタイマーの集まり、という訳ではなさそうだな」

スレイプモンにオメガモンがそう言うと益々タイグドラシル内の空気が重くなる。

そんな部屋の隅っこで、疲れ果てたクレニアムモンが黙々とデータ整理をしていたのだった。

「深の部屋では今信じがたい事が起こっている。
人間以外に喋る生きものがある。否、デジモンが自分達と話して
いるのだ。」

「なあ……俺、日ごろの行いが良かったのかな」

「ない。普段寝てるばっかのアンタにそれはあり得ない」

あまりの現実味の無さに呆けてしまった深に、澪は即ツッコミを
入れた。冷たい視線とツッコミを入れた後、澪はデジモン達に視線
を戻した。

「どこから来たの？」

「デジタルワールドだ」

「帰り方とか分かる？」

「いや……分からない」

「ここ……リアルワールドに来たのは初めて？」

「ああ、初めてだ」

澪の質問にはレオルモン、ドラコモンと順に答えている。

たった数回のやり取りだったが、澪はこのデジモンにはテイマー
というような人間のパートナーがいる訳でない、ということ把握
した。そしてデジモン達はデジタルワールドに帰りたいと思ってる
事も。

「帰りたい、よね……」

澪は寂しげに微笑んで、彼らを撫でた。

見知らぬ土地に放り出されたのだ。誰だって帰りたいと思う。澪
は自分がそんな状況になったら……と置き換えたのだ。

「少しの間、ウチ達と一緒に過ごそうよ。デジタルワールドへの帰
り方だって探すからさ」

2体はきょとんとしている。澪の提案は決して好奇心や欲ではな
い、それだけは分かった2体は小さく頷いたのだった。

「頼りないけど……宜しくね」

「いや……こちらこそ宜しく」

「ほんとに、ありがとう」

デジモン達と一緒に暮らしていく事が決まり、澪、レオルモン、ドラコモンが挨拶をかわす中、深は半置き去り状態だ。そんな深の心の中と言えは、

(え、案外あっさり決まっちゃってるけど大丈夫か？ ……というかデジタルワールドへ帰る道探すって……澪パソコンも詳しくないのか！?)

まあ帰る道はパソコンを弄れば分かる訳ではないだろうけど、なんて思っている深に澪は膝を叩く。

「いたっ」

「ほら、これから一緒に過ごすんだからあんたも挨拶」

「え、あー……宜しくな」

デジモン達と過ごすのは澪のはずなのに……と眉を潜めた深だが、澪は2体のデジモンをこちらに抱き抱えてきた。

「で、どっちを引き取る？」

ぬいぐるみのように前に抱えた澪。それは一枚の絵のようにポー

ズが決まっっていて、ちょっと可愛げがある。

「え」

やっぱりそうくるのか、と深は染々考えた。

いくら彼女がデジモン好きでも、流石に2体のデジモンを世話するのは無いか、と。挨拶させられた時点でそんな予感はずいぶんあったが、やっぱりそうだったのか、と。

「どっちって言われてもな……」

好みとかで決めていいものなのか、人権的に。なんて思うのは深の健気な所だ。そのため曖昧な返事しか出来ないのが、優柔不断と思われがちになってしまうのだが。

「零は？」と聞こえた瞬間、

ぐうう

とお腹が鳴る音が部屋に響く。

それもまた合唱するかのように混ざりあった2つの腹鳴。

「深……と」

「レオルモンか……？」

鳴った本人達以外がその名前を呼んだ。つまり腹音の犯人は深とレオルモンだ。

「腹減った」

「……すまん……」

それなりにシリアスな雰囲気だったのが一気に崩れた気がした。深は自分の家なのであっけらかんとしているが、レオルモンは気不味そうにしゅんとしている。

そんなレオルモンを深は濁から奪い取り、

「腹が減る、疲れる、考え込む、これイライラの三大要素だからな。覚えとけ濁！」

頭に乗せると逃げるようにして部屋を出、階段を降りていった。部屋に残された二人は開けっ放された扉の向こうを見ている。そして、一つ間が空いてから、

「ウチらも降りようか」

「ああ……」

澪がドラコモンをふわりと抱え、深とレオルモンがいる1階に降りたのだった。

これで引き取るデジモンは決まったな、と考えつつ。

6話 『赤いワニ』 1p.

戦いの後、霧が跡形もなくきれいに晴れた。家を覆っていた霧も、街を散布していた霧も、湿気を含んだ空気はまるで風に流されていったかのようにきれいに無くなっている。

デジタルゲートというデジモンを召喚するものも消え、暗かった街灯も元通りに点いた。

そして霧の所為かどこかボンヤリしていた視界。それがハッキリし、契の眼には銃を構えた1体のデジモンが映っている。

「ベル、ゼブ、モンが……？」

契はデジヴァイスと呼ばれる種の赤い“D-アーク”を見つめ、
啞然とした表情だ。

「ま、ニンゲンの力を借りて進化しちまったなんざ、不謹慎なんだから」

啞然としていた契は、ベルゼブモンが近づいて来ていることに気が付かなかった。それに気付いたのはベルゼブモンが契の頭に荒っぽく肘を置いたからである。

「えっ、って止めるよ！ 痛いだろうっ」

体重を移すように契の頭に肘でもたれ掛かったベルゼブモンに、契は首を振る。

「俺様がご丁寧に“宜しく”って言ってんだぜ？　俺がデジタルワールドへ帰る時まで楽しませるよなニンゲン」

「はあっ!？　楽しませるって何で俺がっ」

「つべこべ言うなって。気楽に行こうぜニンゲン!」

そう言ってひらひらと手を振りその場を去ろうとするベルゼブモンに、契は困った表情だ。

「ちよつどこに行くんだ!？　気楽につて……しかも俺には椎橋契って名前があんだよ!！」

「ちよつとリアルワールドの物見遊山でもしてくるから」

こうやって直ぐに姿を消したベルゼブモンは、何処に行くのが目的にも分からない。自由すぎるベルゼブモンの背中を追えずに契は立ち尽くしていた。

傍にいた凜とリヴァイアモンもその一部始終を見ていたことになる。凜に至っては内心「大変なパートナーを持ったな……」なんて

労りながら。

それから契は家に帰り、時間は真夜中。皆が寝静まった頃、夕方にふらりと姿を消したベルゼブモンが再び凜の家を訪れた。

玄関の前に立ってはいるが、闇に溶け込んだその姿と気配。それに気が付いたのはたった1体の“赤いワニ”。

その“赤いワニ”は屋根の上から降ってくる。勿論、ワニも闇に姿を消して。

「がああああああああ」

“赤いワニ”が呻いた声すらも闇に溶け込んでいる。

「もうちょっと静かに出来ねえのかよ」

質量のある体が宙にある間に、ベルゼブモンは左脚の銃を抜いた。その瞬間、凜の家は霧に覆われる。

リヴァイアモンがベルゼブモン目がけて降り立とうとした時、斜め上に構えられた銃が発砲する。

たった一発。それだけの弾がリヴァイアモンの体を降ってきた屋根よりも高く宙に上げた。彎曲にしまった体は尻尾の先まで緩やかに曲を作っている。

もう一度大きく呻ったりリヴァイアモンは紅い目をぎよろりと光ら

せる。月に照らされたりヴァイアモン。
その体は元の倍にまで大きくなっている。

「がああああああああああああああああああああ

「!!!」

大きさに比例するように声の大きさも増す。

「!! 静かにしろって、言っただろうがっ」

ベルゼブモンは速度を増して降りて来るリヴァイアモンに向かって飛び、蹴りを見舞う。

蹴りを腹にまともに喰らったりリヴァイアモンはそのまま家に突撃する。その衝撃は家に反映する事無くリヴァイアモンは地に落ちた。

「ぐるる……」

リヴァイアモンは体勢を整え、小さく、警戒するように声を出す。そんな声に怪訝そうにベルゼブモンが目を細めた。

「“ぐるる”じゃねえだろ」

ゆっくりとリヴァイアモンに近づくために歩を進める。互いに睨み合いながら。

「普通に話せよ。お前、“俺が知ってる” “赤いワニ” だろ？」

2体の距離はもう数十？、そこでベルゼブモンは歩を止めた。そして飽きずに呻るだけのリヴァイアモンに視線を合わせるように屈む。

「よう、何でこんな所にいるんだ、リヴァイアモン」

同じ目線になったベルゼブモンとリヴァイアモン。このように低い自分に目線を合わせる“ベルゼブモン”、否、“デジモン”は只一人しかいない。

リヴァイアモンは同じ七大魔王ベルゼブモンに、それもリアルワールドに来て初めてその声帯を震わせたのである。

「お前こそ、何故ここに来た」

大きな口が言葉を紡ぐと、ベルゼブモンの顔が少し緩む。

「俺が知りてえな。それにしてもお前……随分ニンゲン慣れしてるみたいじゃねえか」

「それは皮肉か？ 中傷か？ 凜を悪く言うならば許さんぞ」

「悪い悪い。別にそういう訳じゃねえけどな」

へらつと笑ったベルゼブモンに、リヴァイアモンは口を閉じた。

「取り合えずさっきの大きさに戻れよ。ちよつとこの世界を見物してきたが……どうも俺達には居心地の悪い場所だ」

リヴァイアモンの大きさについて居心地が悪いと言ったのか、他の意図があったのか、小さく戻ったリヴァイアモンを見るとベルゼブモンは続けた。

「俺達の世界にいるような機械はいっぱいあるが、喋るのは人だけ。おまけに人はどれもこれも似たような容姿しかしてねえ。俺達みえてに“どんな格好したやつ”でも喋るって事はない訳だ」

これがリアルワールドか、と最後に付けし、溜息を洩らす。

「それでも我らは存在する」

リアルワールドでもデジタルワールドと同じようにデジモンは存在する。世界は同じだ、とリヴァイアモンはそう言った。

「まあ、存在してるな」

ひょいと黒い尾を振ってみると確かに自分のものだ。

「我らは我らの世界でなくても存在出来るという事。じきに此処の居心地も良くなってくるさ、ベルゼブモン……」

のっそりと手足を動かし、リヴァイアモンは背を向けた。就寝用にほんのり付いている部屋の灯り。それに向かってリヴァイアモンは姿を消した。

闇に溶け込んでいた筈だった彼の姿は、ほんの小さな灯りによっても姿を消す事が出来た。

「……………」

リアルワールド。ニンゲン。

ベルゼブモンは不思議そうに霧が晴れた家を後にしたのだった。

背を布団に向け、顔は天井を向いている。朝の光が直接顔に当たると、契は眩しそうに顔を布団に埋めた。

もう少し……と思いい布団を握るとそれを遮るように声が聞こえる。

「おい、起きろ」

聞きなれない声に契はスルーの勢いだったが、後から2・3度同じことを言った声は段々と殺気が混ざっているように聞こえた。そして4度目。

「起きろって言ってんだろっがっ！」

契は耐えきれなくなりガバツと布団から身を起した。

「うるさいなっ！ 誰だよ！ 目覚まし時計なんかこの部屋にないっつーのー！！」

こんな目覚まし時計もある訳がない。ドスの効いた声の目覚まし時計なんて誰が好んで買うのだろうか。

「俺は目覚まし時計じゃねえよー！！」

「へ？　べ、ベルゼブモン！？」

「他に何に見えるんだ？　おはようニンゲン」

「お、おはよう」

正面に屈んでいたベルゼブモンに契は赤い髪を掻いた。

「何で俺の家……分かったんだ？」

「さあな。直感、つてやつか」

「そ、そうか」

枕元に置いてあったデジヴァイスに気付いたベルゼブモン。赤いデジヴァイスは、契の髪の色の特徴か、それとも自分の眼の赤か。どちらにせよ、ニンゲンと共にゆける、デジヴァイスとはそういう証だった。

（俺がニンゲンと、一緒に？）

これ以上先の事なんて想像もつかなかった。嫉妬心がいっぱい生きてきたリヴァイアモン、そんな彼に変化をもたらしたニンゲんに、少し興味が湧いたのかもしれない。

「飯だ飯。早く起きて用意しろよ。腹が減って仕方ねえ」

一緒に過ごしてみようと思った。

「はあっ!?!」

驚いて、困った顔をするニンゲンを、軽く笑いながら。

v | 3 3 1 8 6 6 3 9 4 1
<

2 p (後書)

7話 『データの場所』 1p.

お初にお目にかかる。俺の名はカンヘルモンと言う。

本先ほど、リアルワールドから電波が来たようだ。そう、

リアルワールド　つまりは悠史からの通信を拾ったが、それを伝えるべき大神が捜し出せない。

内容はデジタルゲートが開いている場所を捜索しろとの事だった。

しかし……閉じ終わったであろうデジタルゲートの捜索など出来るのか？

そんな疑問を抱きつつ、俺は空が低いスカイロウゾーンを飛んでいる。

スカイロウゾーンは他のゾーンと違い空が低く空の領域が広い。よって羽を持ったデジモンや、空中戦を得意とするデジモンがこのゾーンにいる。地にあるはずの洞窟や建物等も空に浮いているという不思議な景色だ。

「ん？」

空を切るようにスピードを出して飛んでいたのだが、俺の赤い左目が雲に埋まっていたボロボロの青い羽を見つけた。

そのデジモンは怪我をしているのだろうか、と思えばスピードを落として近寄ってみる。

「おい、大丈夫か？」

声は聞こえたらしく、羽がピクリと反応する。

「出れないか？ ひっこ抜くぞ」

地面のような雲はどつやら柔らかくないようだ。しっかりそのデジモンを捕らえ空に浮いている。

持つところが羽しかない以上そこを持って引き抜くしかないと思
い、痛んだ羽をおずおずと掴んだ。

「せーのっ　！」

力任せに上へ引き抜くと青が印象的な巨体が姿を現す。

「あんたはっ　！！」

驚きで見開いた目には、胸にはVのマーク、腕にはブレードが止まる。

「いやあ助かったよ！　雲なのに何か抜け出せなくてさ。困って
んだ！」

あははは、と頭を掻いて笑う姿はとてもそうは思わなかったが、俺は尊敬の意を抱いてるネットワークセキュリティ最高位、“ロイヤルナイツ”の一人と姿が同じだ。

「ロイヤルナイツ、アルフォースブイドラモン!？」

「え、うん。そうだけど、どうかした？」

「うん」とあっさり肯定された俺は次の言葉に詰まった。どうかした訳ではないが、死ぬまでには一度会ってみたいと思っていたロイヤルナイツに、こつこつとあっさりとした、しかもこのような形で出会うとは思ってもしなかっただけの話だ。

「いや……羽に傷を負っているみたいだが、そちらこそどうかしたのか？」

適当にはぐらかし羽の事について聞いてみる。そしてアルフォースブイドラモンは陽気にあはは、と笑ってから答えてくれた。

「ちょっと荒野みたいなゾーンで敵とやり合ってたんだけど、いきなり此処に飛ばされてさ。そして体中が軽く傷を負ってたんだ。移動の時の衝撃って感じか」

「飛ばされた？」

「そこんところは良く分からないんだけど、移動の時少しデータが減った気がするんだよな……」

掌を見つめ真剣な顔をするアルフォースブイドラモン。しかしすぐに彼の顔は砕けた顔になる。

「兎に角そんな事は後でいいや！ 早くイグドラシルに戻らないと！」

「イグ……ドラシルか」

「だけど俺、このゾーンは初めてだな。あ！ 君って見た所究極体みたいだけど、何て名前なんだ？」

「名乗る程の者でもないが……名はカンヘルモンと言つ」

「そっかそっか！ カンヘルモンか！ 宜し」

アルフォースブイドラモンが急にガタンと右肩を落とした。その原因は彼の羽である。

「羽が消えている！？」

「えっ、どうして……！？ これじゃあ飛べなくなるよー！」

どこかに吸い取られるようにアルフォースブイドラモンの羽が消えていく。その吸いよせられる感覚は本人も感じたらしい。

「どこかにデータを持ってかれてる……！！ マズイな……」

「持っていかれてるだって……？ 一体どこに……」

そうこう言ってる内に羽は消えていく一方だ。地に降りた方がいかと思っただが、此処は空がメインのゾーン。空を飛べなければ何かにつけても不利だ。

そう思った俺はアルフォースブイドラモンの手を取り、彼のデータを奪っている場所を探そうという判断をした。

「探そう、データを集めている場所があるはずだ！ そこを見つければ何とかなるかもしれない」

「え、わわっ!？」

彼の神速には到底及ばないが、早く処置を、と思い出来るだけ速く飛んだ。怪しい場所はないか、両の目を光らせて。

最初は驚いた彼も、すぐに笑って「ありがとう」と言い、同じように目を光らせている。

データを持っていかれる所を探し始めてまだそんなに経っていないが、アルフォースブイドラモンの変化が一向に治まらない。

「うわぁ……もう殆ど消えたな」

「何を悠長に。神速を誇るあんたが飛べないだなんて致命傷だろう」

「あははは、そうだな！」

こんな状況になっても柔らかい雰囲気のアルフォースブイドラモンに俺は思わず溜息が洩れた。決して馬鹿にしているということではない。

彼の余裕なのか、彼の性格なのか、焦りを見せないアルフォースブイドラモンは流石といった溜息だ。

「それにしてもカンヘルモン」

「ん？」

「半竜だから古代種でもないっばいし、獣竜には変わらないんだろ

うけど、君って飛竜だったんだな」

「は………?」

「いやあ、中々スピードがあると思ってさ！ 俺より体も小さいし、俺を引っ張って飛んでんのに」

「……まあ、一応は……飛ぶ、な」

「?」

歯切れの悪い返事をした所為か、アルフォースブイドラモンは首を傾げた。彼に悪気がない事は分かっているが……

“半竜”

半分は龍の力。そして俺の場合、もう半分は獣の力。究極体である以上、どんな力であろうとそれは一つの姿になり、一つの力になる。

色んな姿のデジモンがいて、色んな姿の究極体もいる。それは分かっている。

だが俺は究極体であるにも関わらず、完全体に分類されてもいいくらい、姿すらも半々。何か“中途半端”だった。

究極体に進化した時、同じ究極体デジモンにそれを指摘された事もあった。

その時は自分の中にある“いくつかの力”を使いこなせてない時だったから余計にかもしれない。

地を蹴る“狼”の“土”、
空を駆ける“飛竜”の“風”、
そして水中を泳ぐ“水龍”の“水”。

どの力もほぼ均一にデータとして組み込まれてしまった3つの力を、この半竜半獣の姿で使いこなすにはやはり俺には難しかった。どうしてどれか1つの力を優位に組み込まなかったのだろうか、と思った事もある。特に1：2で合わせれば竜族の力が勝ってしまっているしな。

だから俺は選ぶ事にした。そしたら少しは安定して、楽になるのではないかと。それはそれで難しかったが、ほんの少しだけ“龍”の力を優先させたんだ。

とまあ変な事を思い出してしまったが、今の目的は

「いや、何でもない。それよりコレは……!」

「どうやら此処みたいだなあ」

データを奪っていたこの場所。今までもいくつかのデータを奪ってきたのか、チカチカとデータが集まっている。

(只のデータを集めてる場所じゃない……？　もしかして悠史の探しているゲートの跡か)

「あ、あつたあつた俺の羽」

奪われた羽のデータを全て元に戻す作業は案外簡単に終わり、アルフォースブイドラモンは傷一つない羽を2回程羽ばたかせる。

「よかつたあゝホント助かつたよ！　ありがとう！」

「礼には及ばない。それにしてもこのデータは一体どこから……」

「うーん、ほんとだな。俺だって羽しか持っていけれなかったって事は他のデジモンからも少しずつ……」

もう一度データを覗きこんだアルフォースブイドラモンがまさかの仲間のデータがある事に気付く。

「これ、デュナスモンのデータじゃないか……！　どうしてこんな所に……！？」

どこかの一部じゃない、デュナスモンのデータが丸々その場所にあつたのだ。

暑い。何故こんなに暑い。

しかしその答えは直ぐに見つかった。

「深……起きてくれ……」

それは深が俺を抱えて寝ているからだ。それも布団をすっぽり被って。

一昨日昨日今日とこのニンゲンと過ごして分かった事がある。

兎に角こいつは良く寝る。

場所、時間、そんなものは関係ない。眠たくなったら寝る。なんて睡眠欲に忠実なヤツなんだ……

「おい、ほんといい加減にっ」

何度話しかけても反応はない。何せ俺は布団の中なのだから。つまりは深と布団に板挟み状態な訳だ。

いっそ軽く噛んでやろうかと思った。しかし、何とか堪える。

ロードナイトモンもそれなりに我儘なヤツだが……これは新手の嫌がらせというか……

ロードナイトモンとは正反対で強引さは全くない。しかし無気力過ぎる……

俺の中では対処が分からないニュータイプだった……

「くかぁー」

……
本当にどうすればいい……暑いのだが……

困りに困り果てた俺は、落ちつきなく手足を動かしていた。その感触が良くなかったのか、深の腕の力がやっと緩くなった。

「んー」

両腕を上げたのか、布団も捲り上げられ、やっと暑さから解放される。そして俺の頭の中で“深を起こす方法”が一つ更新される。

「おはよ」

「あ、ああ。おはよう」

腹の上に乗っていた俺は、気の抜けた挨拶を貰った。そのころはちゃんとしているのでまあ、いいだろう。

サウナから出た後のように暑さがマシになり、ぼーっとしていた頭も働いてくる。そもそも何故こんな状態になったのか。

それはニンゲン界で言う夏休み前、昼までの学校から帰ってきた深は前置きもなく布団に伏せた。今日は部屋から出るなど言われていたので、深の部屋にいた訳だが、帰ってくるなりボタンと転がった深に何かあったのかと焦ってしまった。

しかし、何の事はない。顔を見ると只幸せそうに寝息を立てているだけ。

不意に近づいてしまった俺は、そのまま深の腕に捕らわれ布団に引き摺られたのだった。

どうやら昼寝の1時間は満足のいく1時間だったらしい。

起き上がってもぼうつとしている深が、何かを思い出したように話しかけてきた。

「あーそうそう。ドラコモンは相変わらずの調子だったさ」

「そうか」

エグザモンと分かれてまだ3日と経っていないが、それは嬉しい情報だった。何が起こるか分からぬ地で安否を確認する事がこれほど安心する事なのだと初めて知る。

いくら俺達を引き取ってくれたニンゲンの学校が同じと云えど、そう毎日は顔を合わせられない。成り行きとはいえ、知った者同士を引き離してしまった深なりの気遣いなのだろう。

「あとさ、漣がデジヴァイスみたいなのが現れたって言うんだ」

「デジヴァイス？」

「うん。何か、逆三角形みたいな形の青いのが昨日現れて、それを見せてくれたんだけど……」

口では伝えきれないのか、深はペンと紙を取り出し俺の目の前でその絵を描き始めた。

「こんな感じだったか……」

「これが、デジヴァイスか？」

「多分、そつらしい」

デジヴァイス。それは選ばれたデジモンと選ばれたニンゲンが共に行けるという証。

リアルワールドに行けば強さを得られると言われているのは、多分これが一つの力であり一つの手段とも言えるからだろう。

「という事は、二人はタイマーになったという事か」

「タイマー……？ あーうん。まあそうなるなあ」

奇妙な事もあったものだな。まさかロイヤルナイツであるエグザモンがニンゲンと共にいるなど……

「ティマーか……具体的に何するんだろうな」

「俺がデジタルワールドで見たニンゲンのティマーとやらは、カードを使ってパートナーデジモンの援護をしていたが」

「カードでか。そんな事出来るのか!? ん? ってかデジタルワールドに人間っているのか!？」

不味い発言だっただろうか……

正直なところ、俺はティマーとそのデジモンにそんなに詳しくない。

かなり興味を持ってしまったような深に、取り合えず分かる事だけ言う事にする。

「普通にいる訳ではないが、ニンゲンはいるぞ。俺達がこっちに来れるようにニンゲンも行けるのかもしれない。カードは良く分からないがな」

「そうかあ。やっぱりこれも現実にあるんだな」

「現実には?」

「うん。デジモンってさ、物語や想像の世界だけのものだと思ってた」

「そうか……」

「ごめん。否定してる訳じゃないんだ。ただ本当にあるって知って嬉しかっただけだからさ」

「……」

その先は何て返したらいいか分からなかったが、デジタルワールドでもニンゲンを見るものは一部だ。だから、多分こっちでも同じようなものなのだろう。一部のニンゲンがティマーとなり事実を知る。

やはり、デジタルワールドもリアルワールドも何処か似ている。だからこそ、エグザモンのようにこうやって新たな道が開けたりするのかもしれない。

8話 『ネット上のデジモン』 1p.(後書き)

ここで初めて挨拶させてもらいます。秋水とさか と申します。

皆様、DIGIMON・Bakeの閲覧ありがとうございます。

お気に入り登録、コメントや評価までして下さり本当に嬉しい限りです。

趣味で書き始めたものでしたが、とても励みになっていて、とても感謝です！

拙い文章ではありますが、本当に読んで頂けるって嬉しくて……

感謝！

「なあなあ、レオルモンってネットとか詳しいの？」

パソコンに電源を入れながら深そう尋ねてきた。

「まあ、詳しいんじゃないか？」

「そうか！ あの子、コレ、見てほしいんだけど……」

無機質なデスクトップ。此処に来て最初に見たパソコンのデスクトップは俺達ロイヤルナイツが飾ってあった。その後分かった事だが、あの小さなパソコンの所有者は溲だったようだ。

見てほしいと言われ、パソコンが置いてある机に飛び上る。そこにはネット画面が開かれていて、俺達デジモンがネット上で育成出来る、というようなサイトだった。

「デジモンの育成か？」

「うん。ちょっと前までは小さい携帯ゲームだったんだけど、今はネット上でも出来るんだ」

「便利になったのだな……」

「まあ、なったな」

成程。ネット上でデータを管理する数が多くなったという事か。もしかして俺達のデータ整理が多いのはその所為なのだろうか？

「でさ、思ったんだけど、こういう所からデジモンが来たりとか、生まれたりってするのかな」

「どうだろうか……」

「そもそもこのネット上のデジモンって、本物か？」

「本物……？ いや、これは本物ではない」

「そうか」

「ああ。お前が言う本物とは、俺達のように生きている、という事なのだろうか？」

「うん。例えばさ、このネット上のデジモンが本物なら、そしたらこっちに出て来る事も可能なのかって思った」

「成程。デジモンが本物であるかないか。それはデジタルワールド、もしくはリアルワールドでその姿があれば本物だ。だがここにあるのは画面上の只のデータ。本物ではない」

「うん」

「このデータから本物が生まれる可能性がないとは言いきれないだろうが……」

「姿が出来るって事か」

「ああ」

深が思いついたデジタルワールドへの帰り道。つまりはこのサイト上のデジモンが本物であったら、ゲートもあるのではないかとの予測だ。ぼづつとしているようで中々頭は回っているらしい。

びろびろ

「「？」」

びろびろびろ

「レオルモン、今何か聞こえたか？」

「ああ。聞こえた」

機械的な音が聞こえる。どこからか……それはどうやらパソコンからのようだ。

「誰、ってか何だ？」

深パソコンに話しかけると、機械的な音は言葉となって返ってきた。

『よかった。聞こえるひとがいるんだね』

「？ まさかお前、ここに存在するデジモンか？」

「うん」と返したそいつは、まさに本物が本物でないか、先の話
を証明するかのようなタイミングだった。

「デジモン……！？ まさかこのサイトから生まれたデジモン？」

『うん、ボクはここで生まれた』

「お前はリアルワールドにタイマーがいるのか？」

『うん、ボクを育ててくれたひとはいるよ』

「じゃあここから出ようとは思わないのか？」

『出たいよ……けど、出れないんだ』

「出れない？」

『阻むんだ。あのデジモンが。今もそう……』

「今も！？　ってちよ、おい！」

ザザザ、と雑音が入り、段々と声が聞こえなくなる。そして最後に聞こえた言葉は

『たすけて、ボクの願いを』

これを残し、ネット上のデジモンとの会話は断たれた。

「助けてって……何があつたんだ!？」

「分からない……だが他にもこのネット上にデジモンがいるという事か」

会話が途絶えた最後の言葉、「たすけて」と「ボクの願いを」。しかし、あまりに突然過ぎる出来事にどうしていいか俺は判断しきれない。

だが深は違った。相手が敵かどうかも疑われないまま、気だるそうな目でこう言ったのだ。

「このネット上の世界に行けないだろうか」

「お前っ、この中に行くというのか!？」

「だって助けてって言ってたろ。しかも何だよ『ボクの願いを』って!？ 気になるだろうかっ」

「お前は気になるだけで中身が分からない世界に行くというのか!？」

「だったら放っておくのかよ!？」

「そうは言ってない! だがお前がそこに行って戦えるのか!？」

「……それは、……」

「必ずしも戦いがあるという訳ではない。だがもしもだ、戦いがあった場合、その光景を見るのはお前だ」

「……」

「戦いに関しては、デジタルワールドとリアルワールドでは違いすぎる。俺はここに来てそれを知った」

「確かに、ないよ。デジモン達がするような戦いはリアルワールドにはない……」

リアルワールド（ここ）は平和だ。そしてこいつは、こいつ自身は多分平和だ。

デジモンがどんな戦闘をするかなどは想像出来るのだろうが、きっとこいつが思っている以上にその光景は穏やかではない筈だ。

そんな者がイキナリ戦いの場に入ってどうしようというのだ？
ならばせめて俺一人が行く方がよっぽどいい。

テイマーでもないお前が、踏みこんで帰ってこれる保証はない。
奇跡を起こすマグナモンではないのだから。

「何とかしたいのなら、まずは漣とドラコモンを呼べ。そしたら俺も共に戦える」

そう言うと深は少し伏せていた顔を上げた。

「おまえは戦えるんだな？」

俺は戦えるつもりでいた。そう、勿論自分が成長期である事を前提に、ドラコモンにテイマーが出来たのなら、何とかドラコモンと共に戦えるだろうと。
だが

「俺、一人でか？」

深の目に射貫かれた。そして一気に不安が込み上げてきたのだ。今の俺は成長期なのだ。それがロイヤルナイツの力であっても、力は成長期。

敵がいる中、有力か無力か、そう聞かれると技はあれど力は深と対して変わらないかもしれない。

「戦う力は持っている。少なくとも俺よりは。違うのか？」

「……いや……」

何故かさつきと形勢が逆転してしまった。強く問う深に、普段の深ではない一面をみた。

「いや」を肯定と取った深は軽く俺の頭を撫で、肩に俺を乗せる。

「戦えるのなら十分だよ。力を貸してくれ。俺はテイマーじゃない」

「……何故そこまでやるうとする……?」

「……これが何か役目のサインだったら、俺は見逃せない。ここにも俺の役目があるんだったら無視する訳にはいかないからさ」

「デジタルワールドの事でもか?」

迷わずこくと頷いた深は完全に瞼がはつきりしていた。

だから戦いの最中で寝る事はないだろう、不謹慎ながらもそう思えたのだった。

「行くう」

「ああ、行くう」

行き方など分からない。だが行くと思えば……その先に行けるのだ。

パソコンの画面からネット上へ

デジタルワールドとはまた異なる場所。0と1の世界、そこに辿り着いた俺達。景色は白一色で、本当に生命の欠片も感じられない場所だった。

それがこの“ネット上のサイト”のデジタル世界。

以前オメガモンから聞いた事があるが、ここに侵入しネット上のデータを食い尽くすデジモンが現れたらしい。勿論オメガモンがデリートしたのだが、その力は強大であり、相当の深手を負ったと言っていた。

データの補食、そんな事も出来る世界だ、相手によっては厄介といえは厄介。平気でどんなデータも食ってしまうヤツが敵でない事を祈るばかりだ。

「にしても真っ白だなあ。ほんとに何も無い」

「そうだな。何処を目指して歩けばいいのか……」

「ほんとだな」

深の肩から降り、上下左右を見渡してみる。すると0と1だけでなく、ドット化された平面のデジモンがいるのが見えた。

「深、あそこにデータが集まっているようだ」

「行ってみるか」

着くとそこには命が吹き込まれていないデータが無数に集まっている。「たすけて」と訴えてきたデジモンはここから生まれた事になるのだろう。

しかしながらドット化されたデジモンが周囲に集まってきている。これらには意思などないはずなのに、それを不審に思った時には実リ体化アライズしたデジモンの気配がした。

「深、近くにいますぞ！」

「何だつて!?!」

「侵入者はお前たちか」

「!?!?!」

リアライズ
実体化しているのはネオデビモン。

「ネオデビモン、完全体かよっ!?!」

「どっつする、このままでは勝算は……」

「っ、兎に角戦わないで、あの声のヤツを見つけるのが先だ」

「分かった」

この場を去るといふ深の判断に任せ、ネオデビモンを背に走る体勢を取った。

そして走り去ろうとした時だ

「お前達が探しているのはこいつか？」

ネオデビモンが片手で抱えていたデジモン、それは幻獣型の成熟期、エアドラモンだった。

「あんだ達は……さっきの……」

辛うじて声が出た、という感じだ。だがその声はさっきのもの。

「おい、そのエアドラモンをどうするつもりだ!？」

「リアルワールドへは行かせはしない。代わりに俺が行く」

「リアルワールドへ行く、それが目的なのだな」

ネオデビモンもこのドットから生まれたというのなら、こいつにもタイマーがいる筈。ならば弱肉強食、それがデジモンの世界だ。

「深、どうする。ネオデビモンにもタイマーがいるのならこうなる事は自然だぞ」

「これがデジモンの生き方って訳だな？」

「ああ」

深は悩んでいるのだろうか？表情がよく分からない。

「とりあえず放せよ。お前のやってる事はお前のタイマーが望んでいることなのか？」

「……」

ネオデビモンに近づいていく深。

「だめ……だよ。近づいちゃ、危ない……」

エアドラモンが危険を伝えようとするが、深は進むことを止めなかった。

「助けてほしいんだろ?!　そして願いを叶えたいんだろ?!」

「だけどこれじゃ……」

「皆犬死にか!?　違う!　自分の目的を、役目を忘れるんじゃない
え」

「深!」

ギルテイクロウ

「なっ
」

ネオデビモンの攻撃が深を狙う。間一髪、俺は深の体を遠くへと押し倒す。

「何をしている!?　前を見る、あともう少しでお前が死ぬところだぞ!」

「ごめん……でもあいつの役目はタイマーの元に行ってやる事だろ
うから……」

役目、目的。

強さや希望じゃない。何故お前はそこに拘る？

「……………なら、お前の役目はなんだと思っている？」

「あいつの、手助けに。それ以上の力は俺にないよ」

自分に力が無い事への諦め……………違う、こいつは

「助けたい、のだな」

「うん」

自分が出来る事の範囲を分かっているんだ。

このやり取りの内に、ネオデビモンが再び動きだした。

だが、戦える気がする。

根拠は、ない。

「俺も、全力で向かおう」

「レオルモン……………？」

自分の範囲内で全力を出すやり方、どうやら俺はそれに心を射貫

かれたらしい。

「レオルモンっ?! 体が光ってる……!?!」

お前と共になら、俺が探している“正義”が見つけれられるだろうか?

MATRIX EVOLUTION

レオルモン進化

2 p. (後書き)

デジモン補足

> i 3 2 4 5 0 — 3 9 4 1 <

エアドラモン

成熟期 / 幻獣型 / ワクチン種

神に近い存在といわれている幻獣型デジモン。空中からの攻撃が得意で、性格はかなり凶暴だが高い知性を持っている。

> i 3 2 4 5 1 — 3 9 4 1 <

ネオデビモン

完全体 / 墮天使型 / ウィルス種

人為的に強化されたデビモンの進化形態。個体の意思までも制御されている人造デジモン。顔面のマスクはパワーや意思をコントロールするためのものだと言われている。

こんな感じで何となく雰囲気を押めてもらえればいいかなあ。

「デユナスモン！」

湧き戻ってきた力は究極体へと進化を遂げる。視野は高くなり、四足歩行だった体は二足歩行に。碧い羽は白い空間にはつきりと映っている。

「究極体って……いきなり進化なんて何で……」

「リアルワールドに来るまでは俺はこの姿だった」

「そうだったのか……？」

「ああ。元に戻れたこと、礼を言う」

「いや……」

ネオデビモンがエアドラモンを掴んだまま向かってくる。驚いている深を背中を隠すと、俺はエアドラモンの救出を優先する。

「邪魔だああー！！」

「何っ！？」

加速しようとして飛び立ったと同時に、あるう事がネオデビモンはエアドラモンを球を当てるかのようにこちらに投げってきたのだ。

「くっ……」

「くそっ！」

何とか受け身を取ろうと体を丸めたエアドラモンを、加速寸前でなんとか受けとめた。

そこに深が駆けつけて来る。

「大丈夫か！？」

「ああ、何とか……」

「ありがとう……助けてくれて……」

「喋るな！ まだだ、まだ終わってないだろ」

生を確認した深は早くも礼を言うエアドラモンを一喝する。
そしてエアドラモンを抱えながら俺を見た。

「もう一度言っぞ。力を、お前の力を貸してくれデュナスモン」

「勿論だ」

本当は、貸し借りなど0なのだがな。

気付かれないようフツと笑ってから、こちらに向かって放たれた
ネオデビモンの攻撃を無効化するように攻撃体勢に入った。

「俺の邪魔は、させな
」

ネオデビモンはそう言いかけたが、勿論俺の攻撃のスピードの方が速い。言葉の途中で薄紫の竜の影がネオデビモンを襲う。

「ドラゴンズロア
」

これにて、ネオデビモンのデリート完了。

「……………呆気ないな……………」

「すまん
」

さつきまでの苦労は何だったんだ、と深がぼそりと漏らしたが聞
かなかった事にする。

『エアドラモン！？ ねえ起きてよエアドラモン！』

「？ 声聞こえたか？」

「ああ、聞こえた」

どこかで言った台詞だが、聞こえたのは俺達だけじゃなかったよ
うだ。

「美咲………？」

エアドラモンの体が回復してきている。

「おまえのパートナーか？」

「うん。聞こえるよ、美咲の声が」

「早く行ってやれよな。待ってるだろうからさ」

「でも君達には………」

「俺達は大丈夫だから。な？」

「ああ」

「うん……本当にありがとう」

飛べるまでに回復したエアドラモンは、一瞥してからパートナーが呼ぶ方向に飛ぶ。

「君達に、一つの繋がりを」

最後にそれだけを残して消えていった。

「なあ、これってもしかしてさ」

「ん？」

「俺達がタイマーになったって事か？」

「そつだな」

薄紫色のデジヴァイスを手に、多方向からそれを眺めている深。

「まあ、取り敢えず改めて宜し……」

「ああ、宜し、って深!？」

改めて学習した。こいつが寝るのに場所も時間も関係ない。脳内データ更新だ。

白いネットの世界。深を背負いリアルワールドに戻るまでの道程は長かったように思う。

「……深、起きろ」

「……」

状況は違つが……前もこんな事してなかつたけか？

「おい、深」

「……」

ネット上から帰還し、一夜明けたのだが、あれ以来ずっと寝たままだ。布団の中にいる訳ではないが、何だか振り出しに戻った気分なんだが。

ともあれ、ネットの中ではデユナスモンの姿のまま深を抱えていたが、こちらの世界に帰ってくるなり成長期に戻ってしまった。どちらにしるこの部屋の中で過ごすならこの姿の方がいいのだがな。

「学校に遅刻するぞ……」

深の服を口に挟み、肩を揺すってみるが大して動く事もなかった。服が破れないように調節したからか、俺の力が不足していたからか。

深が少し身をよじり出した時には、既に俺も布団に寝転がっていたのだった。

学校に着くなり机に伏せた深。そのまま半目で半日を過ごしていた。

少しレオルモンの様子を聞こうかと思っていたけど、それどころじゃないらしく帰路に着くまでは放っておいた。

「おはよう」

「お、はよう」

朝の挨拶をした今の時間はもう13時。それでもまだ眠そうに目を擦る深にウチは背中を叩く。

「いたっ」

「寝過ぎ」

「シナ事言ったって、昨日はちょっと忙しかったんだよ」

「ふーん、どうせそんな大したことじゃないんでしょ」

「ひっでえ！ 昨日は大変だったんだって」

珍しくもムキになる深を見て、まあ確かに何かあったんだろって思ってみる。

「で、何が大変だったの？」

「それがさ、タイマーになったよ」

「マジでかつ!?!」

「ほら、これ」

「デジヴァイス……!!」

「そうそう。おまえのと同じだろ」

「うん」

薄紫色のデジヴァイス、レオルモンがパートナーになったのかな。

「昨日さ、パソコンの中の世界みたいなどこに行って、デジモンと戦ったんだ。したらレオルモンが進化して」

「パソコンの中!?!」

「え、うん」

「そんなところ行けたんだ」

「俺も不思議でしようがないって」

「だねえ。でもパソコンから行ったのってデジタルワールドじゃないか
かったの？」

「ああ、何か違う世界らしいよ」

「そっか……」

もしかしてデジタルゲートがあるんじゃないかと期待してみたけれど、
そう都合よくはいかなかった。

「どこにあるんだろうね、デジタルゲート……」

「だなあ。普通にデジモン02みたいにさ、パソコンから開けばいい
のにな」

「ほんとそれだよ……」

タイマーになってこう言うのも何だけど、やっぱりデジモン達は
元の世界に帰れた方が断然いいんだろうって思ってしまう。そもそも
もタイマーになってまだ日も浅い。アニメのように「あなたを待つ

てたんだよ」「ってな感じの出会いでもないのだから、いくらデジモン好きでずっと一緒にいたくても一方的な想いは悪い気がする。

「えっと、明日休みなんだっけ？」

「あーそうだな、休みだな」

「人気の少ない公園とか山とかにでも行く？」

「そうだな。行こうか」

「じゃ、またメールするから」

それだけの約束をして、深の家との分かれ道で手を振った。後は普通に家に帰るだけ、そう思って歩いていたらただけれど……

(? あれ、こんなに家遠かったっけ?)

歩いてても歩いても見慣れた景色が続く。いや、同じ景色な気もする。

「何か……おかしい……？」

そう気が付いた時には景色は歪んでいた。少しずつ、少しずつ。

「うそっ、うそっ！？」

(どーこだ)

「！！？」

声が聞こえた気がした。それも遠くの方なのに心に響くくらいに
ずっしり聞こえた。

ウチは一気に怖くなり、走った。とにかくもう、当てもなく只ひ
たすら真つすぐの道を。

そして気が付かなかったんだ、ずっと、真つすぐの道を走ってい
た事に。

「ようこそ此処へ、さっきの答えを教えてあげよう」

走って走って行き詰った場所、その床は何故かチェス盤が広がる空間。一体どういう事なのだろう？

そしてその声の主は、大きなダーツを構えていて、脚は4つ。そのデジモンは恐らく

「ナイトチェスモン」

「」名答「

何故か会話になっている。人は一人だと不安になるが、会話が成り立ち、その空間に自分以外のもう一人がいるからといって安心する訳でもない。

「そしてもう一つ、私からお答えするよ。『此处はどこか』、それは

黒いナイトチェスモンがパカリと歩を進めた。正方形の黒と白が交互に並んでいる床の上を、1マス進むように。

「此处は私が用意したゲームのステージ」

「……」

ああ、汗が止まらない。

「さあ、私の力の糧となってもらうよ。人間のお嬢さん」

逃げる場所がない。

だけど目の前のナイトチェスモンはダーツの先をキラリと光らせ大きく振り上げたんだ。

「っ、誰かつ！ 来てっ、ドラコモーン……！」

この時怖くて何を叫んだかは覚えていなかった。だけどダーツが振り下ろされた時に、

「テイルスマッシュ ……！」

そう聞こえた。

「何っ！？」

高速で突っ込んできた小さな物体はウチの前に着地し、ダーツはナイトチェスモンの手から弾き飛ばされる。

「漣！ 大丈夫か！？」

「ドラコモン……？」

「よく呼んでくれた。呼ばなければ此処に来れなかったかもしれない」

「え……」

聞こえたっていうのが、ウチの声。小さくも凛々しく前に立つドラコモンは、しだいにウチの恐怖を薄めていった。

「此処から出る。戦うぞ、漣」

「うん」

ウチを引っ張ってくれた気がした。

成熟期 vs 成長期。明らかな力の差だ。だけど応えなきゃ。ドラコモンはウチに言ったんだ。「戦うぞ」と。

靴に入れておいたデジモンカードを手探りに取り出し、想いを籠めた。

「カードスラッシュ　　！！」

そう叫んでデジヴァイスにカードを通す、そしたら何故かドラコモンが光り出して……

MATRIX EVOLUTION

ドラコモン進化

「エグザモン！！」

紅い、大きな翼が宙に浮いていた。翼の中にいるその竜は憧れのロイヤルナイツの姿と同じ、“竜帝”エグザモン。

「どうして、究極体……」

度肝が抜けた、というのだろうか。段階を踏む進化が普通だと思っていたウチにとって、最初の進化がイキナリ究極体への進化だったから。

「元はこの姿だ。驚く事はない。力を与えてくれてありがとう、溲」

大きい、これがエグザモン。だけどエグザモンが微かに笑ったのが見えた。

あとはエグザモンがランスを構え、ナイトチェスモンを狙うだけ。

「一騎討ちだぁー！！！」

「アヴァロンズゲート ！」

ダーツよりランスは長く、大きく、ランスに突き抜かれたナイトチェスモンは内部から消滅した。これが、もっと明らかな力の差。

「エグザモン、お疲れ様」

「ああ、怪我はないか？」

「うん。ありがとう」

もう一度微笑んだエグザモンは、景色が元に戻ると同時に再びドロコモンに戻った。

元に戻った景色を、ウチは小さくなったドラコモンを抱え家へと歩き出した。

2 p . (後書き)

デジモン補足

> i 3 3 0 7 1 — 3 9 4 1 <

ナイトチエスモン(黒)

成熟期ノパペット型ノウイルス種

ダーツを放つ投擲の能手、接近戦には弱い。しかし、脚力は強力で、敵を飛び越えかく乱する。口癖は「一騎討ち！」。

口癖を無理やり入れ込んでみたけど……なんとも言えないなあ。

都会に馴染まずにその店が建っているのは、直樹悠史が亭主として経営するきな粉団子屋。

小さな店だが、店内に入れば和の雰囲気が空気を落ち着かせ、質素なきな粉の香りが鼻を掠める。

奥で数人が団子を作っているが、そこには直樹の姿はなかった。何故かと言うと、それは店の奥の奥、外から見れば店の隣に位置する所に直樹の家がある。直樹は一人……いや、正確には二人でそこで作業していたからである。

「うむ、美味だ」

そう言ったのは他でもない、直樹以外のもう一人、タクティモンだった。

「また食ってるのか……お前も飽きないな」

かれこれ5年の付き合いになる二人だが、タイマーとなった当初と変わらずタクティモンの舌は肥えなかつたらしい。5年もの間、「家に食べるものがない」時や「3時のおやつ」等々、事ある毎に自分が作るきな粉団子を食べ、未だに「飽きた」と言わないタクティモンに良くも悪くも直樹は顔を引き攣らせた。

タクティモンは食べる事に飽きないのだろうが、直樹はその「タ

クティモンが団子を食べる様」を見るのは飽きた様子だ。

「美味しいものを食べる事の何がいけない？ それにこれはお前の腕を褒めているのだぞ、一応」

「……最後が引っ掛かるな、一応って」

褒めているのなら「一応」は余計だろう、と直樹は思ったが、飽きずに食べてくれていると言う事は取りあえずはタクティモンの言う事は嘘ではないので感謝した。口にはしなかったが。

「つつかお前、パソコンの前で食うなっ。きな粉ボロボロ落とすなよっ！？」

「落としてないぞっ。ほらっ！！」

「だぁあっ言ってる側から落としそうだコラっ！！」

「ム」

「ム、じゃねえよっ！」

小さめに作られている団子だが、きな粉がまぶしてあるという事で粉は落ちる。器用に食べない限りは幾らかは絶対落ちる。タクティモンの口には余裕で入るのだが、やっぱり引き抜いた時とかに落とすので、直樹はそれをも注意するのだ。

注意をされ、残りの団子もさっさと食べきってしまったタクティモンが再びパソコンの前に体を向ける。

「どうだ、終わりそうか？」

「うむ、しかし随分と大事なデータばかりを食われたのだな」

「殆ど無くなってるか」

「うむ。無いに等しい」

「そうか……」

タクティモンがしている作業、それは以前何者かによって家のパソコンの食いつくされたデータの復旧。元々家でちよつとした作業が出来るように、本部から必要なだけのデータを持ってきただけの内容だが、本部のパソコンとは違いデジタルワールド管理専用には作られてなく、ウィルス対策も万全ではないためデータは殆ど消費れてしまった。

データが本部のものなら、その管理局　DIBR本部にてデータを移せばいいだけの話だが、それをしてしまったはこの家に一つしかないこのパソコンを数日間本部に置きっぱなしにしなければならぬ。

流石に他の事にも使うパソコンなのでそれは出来ないと、タクティモンが本部からデータをスキャンし今それを移している、という事だ。

「それにしてもお前……さっきからそのサイトで何見てんの？」

「ム、これは刀の模型だな。原寸ではないが1/4サイズになっている。中々出来がいいとは思わんか？」

「……勝手に注文すんなあああ！」

直樹の手刀がタクティモンの固い後頭部を勢いよく叩く。

「ふじっ！」

タクティモンが前のめりにパソコンに突っ込みかけた時、直樹は不十分なデータのアップロードの中に昨日の日付を見つけた。

昨日は何も無かった筈だと直樹がそのデータを開いた。

「なっ何だこの膨大なデータ量のデジモン反応は！」

前のめりの上に直樹が乗っている所為でタクティモンは体を起こすことが出来なく、顔だけを画面に向ける。

「ん？ ああ、これは昨日の昼頃に感じたデジタル反応だな」

「昨日感じた！？ お前昨日何も言わなかっただろ！？」

「確かこの時間は茶の間で芸術作品の鑑賞を、」

「並べてある食器見てたお前の都合なんか知らねえよ！」

家にいるとろくな事をしない、と直樹はつくづく嫌になる。

「でも何でこんなに大きなデータ量なのに反応しなかった……」

「膨大すぎてすぐには拾えなかったのだろう」

「そんなに大きな反応だったのか？」

「結構な量だったさ。デジタルワールドにいてもこれ程の量は中々いないぞ」

「………だったら尚更教えるよ………」

どうやらタクティモンは芸術鑑賞に夢中でデジタル反応など二の次三の次だったらしい。一応反応自体には意識を示したようだったが、その時のタクティモンにとっては大した事ではないと興味の欠片もないようだった。

（しかしあれだけ膨大なデータ、どこかで知ってる気がするが……）

タクティモンが感じたのは、データ量が半端なく多かったと言っただけで、デジモン反応は2体だった。という事はどちらかのデジモンがそれだけのデータを所有しているという事だ。

(まさかとは思っが……)

今になり考え出したタクティモン。

「悠史、ネットワークセキュリティは元に戻ったか？」

「まだだ」

「一つも戻ってないのか」

「何の変化もないな」

「そうか……今後そのデジモン反応を追ってみよう、悠史。もしかしたら見つかるかもしれん」

「ロイヤルナイツが、か？」

「うむ」

膨大なデータ量ということで直樹の頭に過ったのはエグザモン。図鑑にはこちらの最新型機器でもやっと姿を確認出来ると書いてあ

ったのを思い出し、それならばと納得する。

「やっと少し前に進めたって感じだな。それにしても大神からの連絡が来ないってどういう事なんだ……」

電波を発信してもう数日経つ。いつもは一日以内の返ってくる「届いた」というだけの素っ気ない返事すらも返ってきていない。

大神自身に何かあったのか、只単に電波を拾えていないだけなのか、それともこちらからの電波が途中で遮断されたままなのか……直樹の頭には問題ばかりが積り、既に投げやりになりそうな気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6296w/>

DIGIMON Bake

2011年10月21日08時07分発行